

鍊鉄の魔術使いと魔法 使い達～異聞～ 剣の御 子の道

シェロティエラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旧題：「異聞 英雄達の息子とその旅路」

衛宮士郎とイリヤスフィールの長男として生まれた衛宮剣吾。これは彼の出会いと
別れ、旅の記録である。

2代目正義の味方は、その目で何を見つめる。

はい、これはメイン投稿ハリポタに出てくるオリキャラを主人公にしました、各話は
時系列をバラバラにするつもりです。

投稿頻度は不定期になります。

関連作品：鍊鉄の魔術使いと魔法使い達

目次

剣の御子と星屑の勇者たち

青年は夜の街にいた。短く美しい朱銀の神は風にたなびき、身に纏う真っ黒なコートも風に僅かに揺れていた。彼が見つめる先には、建物にヒビが入つたり、一部が唐突に壊れたりなど、摩訶不思議なことが起きていた。そしてその中心には奇妙な服装をした男と、それと対するよう立つ四人の男がいた。五人のうち四人は人型のようなものを背後に控えさせており、老人は薔薇のようなものを右腕に巻きつけていた。

「……師匠の話だと、あの気持ち悪い格好をした男がデイランか。あいつを討伐ねえ」

手元の紙に目を向けた後、再び男に目を戻す。今は一人の学生服の青年によつて、四方八方から宝石の弾丸を打ち込まれている。しかし打ち込まれた男の方は、余裕を感じさせるような動きで最低限の攻撃を避けている。

そして全方向から一斉射撃を受けそうになつた時、男が人型を出して能力を発動し

た。瞬間、周りの世界は時が止まつたように動かなくなつた。その男と戦いを見つめていた青年を除いて。

「……時止めか。それが奴の能力。厄介だがいくつか対策は浮かぶ。問題は吸血鬼としての体だが……まあ死徒ではないから問題ないか」

そうこうしているうちに、攻撃をしていた青年の体は貫かれ、貯水機まで吹き飛ばされてしまつた。傍観していた青年はその死にかけの青年に駆け寄り、腹部の傷を調べた。もう幾ばくもない命だろう。しかし黒衣の青年は懐から大きなルビーを取り出し、エネルギーをほとばしらせた。

すると不思議なことに、死にかけの青年の傷はみるみるうちに塞がり、呼吸も安定したものとなつていた。

「うう……君は？」

「通りすがりの、ちょっと不思議な力を使える人間だ。それより動けるか？」

「ああ、なんとか」

「なら話は早い。もう今日は戦闘できないだろうが、あのキチガイの力はわかつたのだ

ろう？　早く仲間に知らせてやれ」

「待つてくれ!!?　君はいつたい……？」

「話は後だ、早く行け。少なくとも俺は敵じやないと言つておく」

青年はそう言い残すと、そのまま跳躍して男と老人を追つていった。残された青年は人型の力を借り、急いで他の仲間の元に向かつた。

黒衣の青年がデイランという男に追いつくと、そこには喉にナイフを刺して倒れる老人と、デイランと向かい合っている。二人の学生服の青年がいた。片方は青年が先ほど治療した青年だった。

「貴様、花月宮!!?　何故生きている」

「親切な方が治療してくれたものでね。流石にもう戦えないが」

「バカな……治癒能力のスタンド使いなど、お前らの一に行にいなかつたはず……ツ!!?　そこにいるのは誰だ!!?」

デイランの視線は物陰に隠れていた青年に向けられていた。観念したのか、黒衣の青

年は両手を上げながら出てきた。

「貴様か、花月宮を治療したのは」

「さてね。俺はてめえの討伐を依頼されただけだよ、万華鏡の爺さんにね」「ふんっ!!? その爺いが誰だか知らんが、このデイランに刃向かうとはな。死ぬ覚悟はあるのか?」

「井戸の中の蛙に持ち合わせる覚悟はねえよ。その能力をどう発動してるかは知らんが、吸血鬼如きに遅れはとらんよ」

「ほう、ならば思い知るがいい!!? このデイランの『ザ・ワールド』の恐ろしさを!!?」

再びデイランから人型が出てくると同時に、世界は再び停止した。デイラン以外動く気配はない。口元に笑みを浮かべたデイランは、先ず後方に飛んだ後に花月宮にナイフを投擲した。そして三人の背後に周り、能力を解除した。

普通ならナイフは花月宮に飛び、避ける手段はないだろう。時間を停止し、その間に喉元にナイフが突きつけられているのだ。体感すれば、瞬きしている間に喉にナイフが刺さってしまう。

だが能力を解除しても、花月宮が倒れる気配は一向にしなかつた。それどころか、

デイランは自分の腹部に鈍い痛みを感じていた。

腹部に目を向ける。そこには先ほど自分が投げたはずのナイフが刺さつており、学生服ではない、黒衣の青年が何かを投げた体勢でこちらを向いていた。まさか、この青年は自分の能力下でも動け、自分の動きにもついてこれるのか？

デイランの頭は疑問で埋め尽くされた。しかし悠長に構えてはいられない。現に今目の前で、大男を顕現させた学生服の男が、こちらに向かつてきていた。咄嗟に自身もスタンドを出し、応戦する。しかし学生服の青年に気取られている間に、突如参戦した青年によつて、せつかく無力化した老人を治療されてしまった、

「クソッ!!? 一旦態勢を整えるしかない。『ザ・ワールド』!!?」

能力を発動し、時間を止めたデイランは、全速力でその場を離脱した。しかしどうかは気づかない。その体に淡く輝くルーン文字が刻まれていることを。

暫く、花月宮と老人が謎の青年に病院へ連れていかれているとき、残された学生服の青年、白銀淨ノ助は遠くからこちらに迫つてくるデイランの影を見つめていた。先ほど自分の祖父が殺されかけたとき、自身の内から燃え滾る何かが湧いてくるのを感じた。

無論今までのデイランの所業に対しても怒りを感じた。しかし先ほどの感情はそんな生易しいものではなかつた。あえて名前をつけるのであれば、それは殺意。あのとき、淨ノ助は確かにデイランに殺意を憶えていた。

(まだだ。まだまだこんなものじやねえ。奴を倒すには、まだ怒り足りねえぜ!!?)

淨ノ助は静かに鬪志を燃やし、デイランを待ち構える。先ほどよりも力を増したデイランの右手には、力なくぶら下がる数人の人間がいた。おそらく彼らから吸血することによつて、己の力を幾分か取り戻したのだろう。デイランは手に抱えた数人は遺体を投げ捨てる。淨ノ助の目の前に降りてきた。その顔は先ほどまでとは異なり、不敵なものを浮かべている。

そこで淨ノ助は察した。目の前の男は、今までのデイランとは一味違うということを。

病院で最低限の措置を行なつた青年は、急いで自分がつけたマーキングを追つていた。先ほどからあつちこつちを移動していることから、残つた一人と戦闘を繰り広げているのだろう。現在は巨大な橋の上にいるらしい。全身を魔力で強化して現地に向か

う。そこで目にしたのは、デイランの入型が蹴りを、青年の入型が拳を繰り出し、互いに拮抗している場面だった。黒衣の青年は二人の近くに着地し、ことの成り行きを見守る。

本来自分の仕事は、デイランが黄泉還らぬよう完膚なきまで抹消することである。しかし来てみれば、他の一行によつて戦闘が繰り広げてられていた始末。加えて何かしら先祖の代から因縁があるような雰囲気だつたため、なかなか手を出せずにいた。

だが今はもういいだろう。目の前ではデイランの入型が粉碎され、それによつてデイランもまた同時に粉碎した。ここまでやられたのなら、朝まで動けるようになることはないだろう。だが念には念を入れて、こちらの方法で完全消滅させることにした。

青年の判断はある意味で正しかつた。彼がバラバラになつた体に近づいた瞬間、なげなしの力を絞つたのだろう、デイランは両腕を伸ばし、半分になつた顔を愉悦に歪ませ、青年を見ていた。

「せめて貴様だけでも道連れダア!!？」喰らえ、氣化冷凍法!!？」

デイランがそう叫んだ瞬間、青年の掴まれた両足が凍りつき、身動きが取れなくなつた。全くの予想外のこと、先ほどまで冷静だつた学生服の青年も咄嗟に動くことがで

きない。その事実にデイランは己の勝利を確信した。『デイランにとつて両足を凍らせている青年は、治癒能力を持つ少し人より強い人間としか見えていなかつた。

だからこそ彼は理解できなかつた。目から高圧で液体が発射される『空烈眼刺驚』を放とうとした右目が潰れているのか。左目から見える光景が信じられなかつた。右目がある位置に、いつの間にか一本の槍が刺さっていたことを。謎の青年の両腕は、氣化冷凍法によつて凍りつき、凍つていなければ胸から上だけ。槍を隠していたとしても、取り出して使うことはできない筈だつた。

そしてデイランは気づいた。自分の周囲に、十字架のような不恰好な剣が突き立つていることを。そしてその剣から得体の知れない雰囲気が滲み出していることを。

「私が殺す、私が生かす。私が傷付け私が癒す」

「ツ!?」 グギイイイアガアアアア!? ? !? ?

青年が何かを呟き始めた途端、デイランを襲つたのはおよそこの世の苦しみ全て共言えるものだつた。デイランを支配するのは痛みはもちろん、焼かれる、溺れる、切り刻まれる、崩れる、破裂する、そういういた苦しみが同時に襲つてきた。

「休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

青年の言葉は入つてこない。意識が朦朧とし、自分のどこが崩れ去り、どこがまだ残つているのかもわからない。

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は、死の中でこそ与えられる。

——許しはここに。受肉した私が誓う

もはやデイランには苦しむ気力もなかつた。体が浮遊するような感覚が全身を満たし、頭も冷静になつていく。凍つっていた青年はいつの間にか自由の身になり、その手にはロザリオが握られていた。デイランの周りには金の多数の淡い光が集まり、渦を巻き、はるか上空に立ち上つている。その様子を学生服の青年は驚きを隠せない顔で。病院からはもう一人の学生と老人、そして先ほど運ばれてきた妙な髪型のフランス人が眺めていた。

「K_こy_りi_え e_る l_いe i_しo_n」

締めの言葉とともに、金の光は弾けた。その時デイランは、なんとも言えないような充足感に満ちていた。自分では考えられないような、まるで因縁の始まりであるジヨバンニ・ジョーンズが今際の際に浮かべていた笑みを、デイラン自身も浮かべていた。

次があるのなら敵ではなく、純粹なジヨバンニの友人としてありたい。そう夢見ながら、デイランは完全に消滅した。

天に立ち昇る光の筋を見ながら、淨ノ助は意識を目の前な青年に向けていた。年齢は自分とさほど変わらない。だがその実力は高く、外見は自分よりも細身だが、純粹な肉弾戦では自分が負けるだろう。淨ノ助は警戒を崩さないまま、青年に近づいた。そしていつでもスタンドを出せるようにしながら、青年の隣に並び立つた。デイランに刺さつていた槍と、五本の剣は一つの間にか消えている。

完全に光が消えたところで、淨ノ助は青年に向き合つた。

「お前のおかげで、デイランを倒せた。感謝する。だがお前、何者だ。スタンドも見えているようだが」

淨ノ助が訝しげに尋ねると、青年は苦笑を浮かべて淨ノ助に向き直った。

「……俺は衛宮剣吾。こんな見た目だかれつきとした日本人で、通りすがりの魔術師だ」
これが白銀淨ノ助と、彼の最も信頼する三人の相棒の一人、衛宮剣吾との出会いである。

剣の御子と忍の世界　　其の壱

魔術使いとして活動を始めて早四年。父が世界から追放させられたのが一年半前。高校に入学してからは、あまり仕事をできる時間がなかつた。そのため、長期休みに纏めて消化するような状態になり、この前宝石翁に叱られた。

お仕置きとして世界を渡つて修行することになつたのだが、いきなり目の前に起こつているものを見て固まつてしまつた。

考えても見てくれ、魔法陣を通つた先には特撮怪獣並みにデカい九尾の狐がいるんだぞ？　しかもそいつが伸ばした手の先には二人の男女が赤ん坊を庇つて爪を刺されるし。固まるなという方が無理だ。

取り敢えず俺は狐に突進して蹴り飛ばした。序でに男女にも駆け寄り、簡単に治癒魔術をかけて傷を修復したのだが。

「……君は？」

「あとで話す。取り敢えずあの狐をどうにかするんだな？」

「あ、ああ。忍びないが、息子に九尾を封印する。あの子なら、仮令俺たちが死んでも、力を使いこなすと信じて」

俺たちというと、あつちの赤髪の女性は母であり、この男の妻か。話の内容からすると、二人とも長くないのだろう。そして恐らくだが、助かる道は殆ど無いのだろう。

「なら急げ。時間は俺が稼ぐ。お前達の息子は、この先然るべきときまで俺が見守つておこう」

「……どうしてそこまで。さつき僕らの傷を治した技術からして、君はたぶんこの世界の人では無いのだろう？ なのにどうして」

確かに俺にそこまでする義理はない。見捨てようと思えば見捨てられる。俺は父さん達みたいな正義の味方にはなれない。でも親の背中を育つて見てきた俺がここで彼らを見捨てたら、二度と一人前になれないと、親に顔向けできないと直感が告げていた。

「別に理由なんてねえよ。ただ俺の親は、自分の大切なものを守りつつ、救いを求める人々に手を伸ばした」

起き上がりつた狐がこちらを睨みつけてきた。その目には憎しみ以外の何も宿っておらず、我を忘れているようにも伺える。あの状態で赤ん坊に封印すると、もしかしたら赤ん坊が耐えられないかもしれない。取り敢えず頭を冷やさせるか。

「俺の夢は、俺の生まれ育った街を死ぬまで守り続けること。街を泣かせないよう、死ぬまで戦うことだ。あんたの羽織を見る限り、あんたは俺の夢の一端の体現者ということだ。ならそいつに協力しないわけがない。それに……」

狐の口にエネルギーが収束し始めた。恐らく、エネルギー弾か火炎放射を放つのだろう。幸いすぐ近くから衝撃のためか、地下水が湧いている。使わない手はないだろう。

「俺の家系、衛宮の家系は、少なくとも二代前から人のために戦ってきた。争いがなくなるように、せめて目に映る人々に笑顔でいて欲しいがために。俺達衛宮は、その夢を踏まえて各自自身の目標を作り、人々に手を差し伸べてきた。ただ、それだけだ!!？」
水よ、我等を守り給え!!?」

空中に三つのルーンを刻むと、地下水が勢いよく噴出し、俺たちを守るように壁となつた。同時に狐が炎を吐いてきたが、それらはルーンの護りによつて悉く防がれた。護りを解除すると、狐の表情が驚愕に染まつてゐるのが見えた。さて、こちらも反撃に出ますかね。

「焰エンと風チャントを司バーストる精靈ロードよ、我サに灼熱ヒートと疾風ビンの加護ヒートを」

呪を紡ぐと、俺の着ていた黒のコートに紅と新緑のラインが張り巡らされ、それらのラインは俺の顔にも浮かび上がる。切り札は使えないが、今できる全力で挑まないと、俺は狐に殺されるだろう。手加減はしてられない。

「んじや行つてくる。俺が合図を送つたら頼んだぜ」

俺は言葉を発すると同時に駆け出した。

四代目を始末しようとしたときに、突如虹色の光とともに乱入してきた小僧。奴はわしらの使う忍術や仙術とは全く異なる力を使つてゐた。もしかしたら使うエネルギー

とチャクラではないのかもしれない。とにかくやることなすことが異質だつた。

その証拠に目の前の小僧は、全身に妙な力を張り巡らしてこちらに向かつていてい。風のように早く鋭く、炎のように荒く雄々しい動きでわしを翻弄する。滅多なことで傷付かないわしの体が、どんどん傷んでいく。

攻防を続けていた中で、小僧は何度もわしに問い合わせてきた。

「なあ、お前さんは何に憎しみを持つてるんだ」

何故そんな馬鹿馬鹿しいことを聞くのだろう。自分が憎しみを抱くのは人間以外の何者でもない。昔から人間はわしらを見下し、モノとして扱い、力として見ることしかしてこなかつた。そんな存在にどうやつて良い感情を持てと？

わしが叫ぶように攻撃とともに吐く怨嗟の言葉を、小僧は口を挟むことなく聞いていた。生意氣だ。何もかもわかっているような目をしている。その目が自分を余計に苛立たせた。

「どうせ貴様もそうだろう!!」？ 世界が変わろうが世代が変わろうが、人間の本質は変わらん!!？」

怒号とともに口から火を吐く。それを奴はまともに食らって、地面に落とされた。少し、ほんの少しだけ溜飲が下がり、小僧に目を向ける。そしてわしはまた驚いた。奴は殆どダメージを受けず、諦めを感じさせない目をこちらに向けていた。

わしと戦った千手柱間でさえ重傷を負うのは必至だった。まあ今の攻防の何倍も激しいモノだつたが。それでもそこらの忍程度では悪くて死ぬほどのものだ。忍でもないものがここまで耐えられるものだろうか？

疑問を頭で解消しようとしているときボソリと。

「……アーチャーと、話に聞いた親父の成れの果てにそつくりだ」

小僧がそう呟いたのが聞こえた。その言葉を聞いたとき、頭が幾分か冷えたのが自覚できた。小僧の言葉から察するに、小僧の父親の成れの果ては、人間に憎しみを抱く乃至人間に絶望したのだろうか？ この小僧の父親はい何をしたのだ。

「……氣になるか？ なら取引だ。俺の全てを見せる代わりに、お前の全てを見せてもらうぞ」

そう言つた小僧はわしの頭に乗り、手を当ててきた。どうやら写輪眼のような一方的なものではなく、相互干渉するものらしい。だからか、写輪眼のような嫌悪感があまり湧かなかつた。まあ気持ち悪いのは変わりないが。

手を当てられた箇所から妙な力が流れ込む。それと同時に頭の中に声が響く。

「これより汝が見るのはある男の末路。我が母より受け継ぎし、『世界』に囚われた別時空の我が父の記録」

その言葉とともにわしの精神は、万華鏡のような天井と床に覆われた空間に入れられた。

剣の御子と忍の世界 其の式

忍、言い方を変えるのならば忍者とも言われる職種。この世界では忍者という存在が当たり前である。

初めて知ったときはとても驚いた。何故なら諜報だけでなく、所謂何でも屋みたいなこともしているからだ。迷子の捜索を忍者がやっていると知ったときは、開いた口が塞がらなかつた。この世界では、スパイと警察、探偵業を忍者が兼任していたのである。

「……どの世界でも、人は争うのか」

戦の準備を始める人々を眺めながら、俺はため息をついた。事の詳細は分からないうが、世界を統べようとする組織を止めようとする戦らしい。そして鍵を握るのが、俺かこの世界で十六年前に助けた赤ん坊だとか。たしか名前はナルトだったか。

あの後オレは元の世界に還つたが、師匠と凜姉に頼んで定期的にこの世界に来ていた。今回はこの世界で四年年、元の世界で十年経過した時点で訪れたが、時の流れは速

いらしい。

五年前まで『木の葉隠れの里』では、ナルトは里一番の問題児、いたずら小僧として有名だった。また意外性N.O.・1忍者としても名を馳せていた。それが今や里の英雄になっている。人間どう化けるかわからないものだ。

それにしても後ろからくる気配、随分と懐かしい感覺だ。

「ねえ君、何してるの？」

「やっぱカカシさんだつたか」

「あれ？ その声……もしかして剣吾？」

〔御名答〕

俺は腰かけていた岩から立ち上がり、声をかけてきた男性と向き合う。

彼の名前ははたけカカシ。ナルトの班の隊長で、俺が救えなかつた男の教え子。特別な力を持つた左目は額当てで隠されており、顔の下半分はマスクによつて隠されている。俺自身この人の素顔は見たことがあるが、久しぶりに見る彼の顔は、どことなく老けたように感じる。

「随分と疲れてそうですね」

「ま、戦争前だからね。色々と準備もあるし、気が抜けないのよ」

「戦争……ね」

「うん」

それつきり俺たちは黙りこくる。どちらとも口を開くこともなく、空を見上げる。

青い空が広がっていた。まるでこれからたくさん人の血が流れるのを『知るかそんなの』とでも言いたげに太陽が照らしている。白い雲は優雅にそれを泳ぎ、風は大地に小波を立てている。

「……随分と見なかつたけど、いくつになつたの？」

「今年で二十五だな」

「じゃあそつちでは十年経つてるんだ。早いね！」

自然と他愛もない会話を始める。互いに戦争のことなんて考えたくもないのだ。もしかしたら知人が死ぬかもしれない。同僚が、友が、教え子がこの戦争で命を落とすかも知れない。

忍という立場に身を置いている以上、命の危険は承知の上であろう。だがそれでも、一度に沢山の命が失われることは殆どない。最後に戦争が起きたのはおよそ十数年前、ナルトが生まれる少し前である。その時もたくさんの死者が出たのだろう。カカシの友も、その時戦死したと聞く。

「剣吾はどうするの？」

「戦には参加しないつもりさ」

「そうなの。君がいたら、敵味方共に余計な犠牲が出ないとと思うけどなあ」

「俺はこの世界の人間じやないから。十六年前は兎も角、今回は余程のことがない限り手を出さんよ。本来はカカシ達でやらなければならないことだからな」

「ま、それ言われちゃしようがないね」

たはは、とカカシは困ったように笑う。勿論手を貸したいのは山々だ。だが俺はこの世界では異物、おいそれと手を出して『世界』から目を着けられるわけにはいかないのだ。今までは抑止に抵触しない、最低限の関わりに済ませていたため、何も問題は起らなかつた。だが俺が戦争に参加することで抑止が働くば、死者を最低限に留めることが出来なくなる。

「クシナさんには会つていかないの？」

考え事をしていると、カカシが話しかけてきた。クシナとはナルトの母親である。あの日、何とかして九尾、九喇嘛をなだめることに成功した俺は、九喇嘛に頼み込んでクシナさんを蘇生させた。その甲斐あつてか、ナルトは母親の愛情を受けてしつかりと育つてくれたようである。

「少なくとも、この戦が終わるまで会うつもりはないよ」

「そう」

「カカシ先生、何さぼつてるんですか？」

カカシと話していると、桃髪の少女がこちらに駆け寄ってきた。彼女以外にも金髪ボニテの少女、頭で髪を二つの団子に結っている少女もいる。確か春野サクラと山中いの、テンテンだつたか。三人とも年相応に成長しているみたいだ。

「あれ？　この人誰ですか？」

「どつかで見たことあるような」

「こんな珍しい服着てる人、そうそう忘れないけどなあ」

三者三様に反応を示すさまを見て、俺とカカシは苦笑を浮かべた。これ以上俺がここにいると、作業に遅れが出て支障が出るだろう。無関係者は早々に立ち去るとしよう。

「じゃあなカカシ。元気そうでよかつた」

「そうだね。生きてたら積もる話でもしようね」

「変な旗立てるなよ。またな」

俺はカカシ達に背を向け、その場から去つた。背後から俺が誰なのかを知つて驚愕する声が聞こえたが、まあ戦が終わればいくらでも話す機会があるだろうよ。それまでは傍観させてもらうか。

結論を言うと、俺は結局戦に介入した。明らかに抑止力が働くような事案が起こつたためだ。

死者が大量に蘇ったことはまあいいだろう。実際彼ら自身の手で死者をお封印できているし、最終的には術は解かれ、死者は黄泉に還つていったからだ。

問題はその後だ。目の前で超巨大な怪物が出てきて暴れたと思いきや、何故か更に四人の死者が味方に付いて一時優勢に立つた。そこまでは良かつた。だが何者かがその怪物を吸収し、一気に情勢が崩れた。

——剣吾、聞こえるか？

そのとき頭の中声が響いた。既に座に招かれた父の声が、何故か俺に語り掛けてきた。父は元の世界だけでなく、移動した後の世界でも英雄と崇められ、そのまま天寿を全うした。その後、座に招かれたことは分かつていたが。

「どうしたんだ？」

——『世界』からの通達だ。『抑止』が働くことになった。

「成程、父さんが出るのか？」

——いや、オレが出るのは後だ。まずはお前が出る、それでも困難ならオレも出る。「了解、そんじや父さんが出なくともいいように頑張りますかね」

——ならお手並み拝見だな。

そこで念話は途切れ、俺に力が湧くのがわかる。成程、俺は世界と契約はしていないが、これが抑止の加護という奴か。ならば早速行くとしますかね。

崖の上から立ち上がり一気に駆け降りる。そして降り立つた場所は、木造りの巨大な千手観音の前だった。周りは急に現れた俺に対し、動搖が隠せないようだ。だがその中で一人、冷静にこちらに目を向ける者がいた。

「久しぶり、になるのかな？　まさか死んでたとは思いませんでしたが」

「そうじやのう。懐かしいが積もる話は後じや。おぬしがここにいるということは、手を貸してくれるのか？」

「ああ、でもここではなく向こうの杖持つた奴だけど」

「ならば早く駆けつけるといい、ここはわしらに任せて行け」

「了解!!」

全身に強化をかけ、全速力で杖を持つ奴の許に向かう。そしてそのスピードが乗ったまま風と炎を纏つた拳を叩きつけた。叩きつけられた奴は、面白いように吹っ飛んでいく。だが殴りつけた感じ、どうやら人間とは違った感触がした。恐らく怪物を取り込んだ時に、色々と対組織が変質したのだろう。

「……あれ？ もしかして剣吾兄ちゃんだったば？」

「随分とかくなつたな、二人とも。それに、強くなつたようだ」

「……」

俺の後方には、あの日助けた赤ん坊とその親友だつたもの。どうやら片方、サスケのほうは何やら狂気に侵されかけている気がするが、まあ今はいいだろう。意識を前方の敵に向けると、両隣に二人とは別の人物が立つた。片方はとても懐かしい人物だ。

「やあ、君にとつては久しぶりになるのかな？」
「そうだな」

「四代目、こやつは何者だ?」

ミナトとは逆側から問いかける男性。古風なしやべり方をしているということは、ミナトよりも前の人間なのだろう。得体のしれない俺を警戒しているのがわかる。

「ま、警戒するのは構わない。でも今はあいつを優先しましようよ」

「ん、そうだね」

「はあ、気楽な奴らだ」

男が呆れてるのがわかる。苦笑すると同時に、前方の瓦礫から人が勢いよく飛び出した。俺が殴った頬はひび割れ、切り傷と火傷が体を襲っている。どうやら普通の忍術とやらは効かないらしいが、俺の攻撃は通るらしい。ならば話は早い。

「——イミテーション投影開始」

両の手に鋼の槍を生み出し、それぞれに風と炎を纏わせる。それを見た隣の男性とサスケは驚愕を、空に浮いている男は憎悪を浮かべた。何故俺を憎々しげに見ているかわ

からないが、殴つたことではないのは確かだ。

「さてナルト、ミナト。準備はいいか？」

「ん!! 問題ないね!!」

「いつでもいいってばよ、兄ちゃん!!」

ミナトの隣にナルトとサスケが並び、それぞれ構える。どうやら準備万端みたいだ。
んじやまあ、行きますかねえ。

剣の御子と兎の家

石畳の道や木造の家々が並ぶ街並みは、日本ではなくヨーロッパの都市郊外にいるよう錯覚させる。この街の名前は「木組みの街」。街全体が穏やかな空気に包まれ、都会では見られない、野生のウサギが堂々と闊歩している光景も眼に映る。

その街にあるカフェ、「ラビットハウス」では、時間帯がお昼時であることや日中が暑くなってきたことが合わさり、多くの客でひしめき合っていた。店内では今亡きマスターの孫であるチノとその学友のマヤとメグ、アルバイトのリゼとココアが汗を浮かべながらせわしなく店内を動いていた。

「チノちゃん、3番のお客様にブルーマウンテンを一つ
「リゼさん、5番のお客様がお会計です」

いつもはそれほど混まない店内も、今日ばかりは混雑している。まるでクリスマスの

時のような状況に、少女たちの疲労は確実に溜まっていた。途中シャロや千夜が助つ人として参戦し、昼時を過ぎた頃になんとか一息つけるようになつた。店内にいる客もゆつたりとコーヒーを飲む数組だけになり、助つ人要員は総じて休憩としてカウンターで一服していた。

そんな時、カフェの入り口が鈴を鳴らして開かれた。そこに立っていたのは藤色の長髪と琥珀色の目が特徴の美少女、その傍に立つのは朱銀の髪に紅の目を持つ青年だつた。二人とも顔が非常に整つており、且つ特徴的な外見のために、リゼ以外の客や店員は驚きの視線で彼らを見ていた。

「いらっしゃい紅葉。席はこっちだ」

「あら、ありがとうございますリゼちゃん」

紅葉と呼ばれた少女は傍の男性と共にカウンター席に座つた。昼時は過ぎたため、今メニューとしては軽食やデザートがメインとなつてゐる。

「よく来てくれたな。それと彼女がこの店のオーナーの孫であるチノだ」
「よろしくお願ひします」

「よろしくね。ふふふつ、しつかりしてゐるわね」

しばらく紹介も兼ねてリゼと紅葉が話していると、ココアがメニューを聞きに三人に近寄つた。

「いらっしゃいます。ご注文はお決まりでしようか？」

「はい。オリジナルブレンドとエスプレッソ、それとこのケーキをお願いします」「かしこまりました!!？」彼氏さんは他のご注文はござりますか？」

ココアがそう発言した瞬間紅葉は声をあげて、しかし上品に笑い、青年は複雑そうな顔で後頭部を軽く搔いていた。リゼも下の妹は会つたことがあるが、紅葉の男の関係者は初めて会うため、この青年を紅葉の恋人と考えていた。

「ふふふつ、彼氏ですつて」

「まあ外見が似てないからな。兄妹と言われてもわからないだろう」「兄妹!!?」

二人の言葉に店内は動搖が走った。リゼは兄の外見特徴を話しには聞いていたが、今ここで言われるまで気づかなかつた。男の言う通り、外見は似ているとは言えず、兄妹よりも恋人と言われた方がしつくりくる。

と、そこに今まで自室にいたチノの父親が顔を出した。

「何やら叫び声が聞こえたけど、どうしたん……」

チノの父親であるタカヒロは、青年を見るなり固まつた。いつもと違うタカヒロの様子にチノとその頭上のウサギがアタフタし、事情を飲み込めない他の面子も何事かと視線を彷徨わせる。周囲の状況が混乱する中、タカヒロは無言で青年の元に近寄り、顔をマジマジと見つめ始めた。

「……似ている。衛宮さんによく似ている」

「ツリ?」

タカヒロの発言に、今度は青年と紅葉が固まつた。そしてウサギ、ティップー衛宮と言ふ単語に反応し、そして納得がいったような表情を浮かべた。

「父と何かご関係がおありで？」

探るようすに青年が聞くと、タカヒロは我に返つて青年から距離を開けた。

「すまないね。僕の料理の師によく似ていたから」

「なるほど、父の弟子でしたか」

意外にも判明した父との関係に、紅葉とチノは目を丸くしていた。

「初めまして、私は衛宮剣吾です。父は衛宮士郎で母はイリヤスフィール・フォン・アイ
ンツベルンです」

「同じく間桐紅葉です。父は衛宮士郎、母は間桐桜です」

青年、剣吾と紅葉が自己紹介すると、店内が騒然とした雰囲気になつた。当然である。
彼らが今挙げた両親の名は、世界的に知られている「鍊鉄の英雄」、「冬の聖女」、「落花
繽紛の聖母」に他ならない。

そのためか客は勿論、リゼやチノ、ココアといった面子も目をこぼす程に丸くし、口をポカンと開けていた。

「どうか、師の子供達か。師は元気にしているのだろうか？」

「父は元気にしております。次会つた時に伝えておきますよ」

「ああ、ありがとう」

店の中の空気は若干緊張を残したままだつたが、その後タカヒロと剣吾、紅葉は衛宮士郎の今と昔の話で盛り上がり、ゆっくりとした時間を過ごしていた。

剣の御子と灰被り姫たち

「文化祭実行委員だあ？ なんでまた俺が？」

夏休みも明けたある日のホームルーム、文化祭のためのクラス役員を決めるとき、何故か俺が推薦された。いや、今まで俺はそういうた催し事は傍観に徹していたのだが、なんでした。

「いや、今回外部から来てくれるゲストが特別でさ。なんでも芸能人が来るらしくて」

それと俺になんの関係があるのだ？

「いや、社交界とかで慣れてそうな衛宮が適任化と思つて。だつて中学の時から色々やつてるんでしょ？」

「それはそうだが……俺がやつていたのは芸能関係じやないぞ？」

「それでも僕らより外を知ってるじやん？ 向こうさんも慣れてる人のほうがいいと思つて」

どうやら俺が委員をやらなきやいけないのは確定らしい。もう何を言つても現状は変わらないだろう。ならば精々与えられた仕事を熟しますかね。

腹を括つて委員になつたその日の夕方、父親の代から世話になつてゐるカフェ、アーネンエルベにバイトで向かつていた。妙な猫が店員をし、漫才コンビのようないつの少女が店員で、コーバックさんが携帯でしゃべる妙な店だが、まあある程度の人気がある。実際猫店長と橙髪の同僚が作る飯は美味しいし、緑髪ツインテの同僚のおかげで店はいつも清潔だ。んで、俺は高校入学と同時にウエイターとして雇われてゐる。

その道すがら、一人の女子高生を見かけた。茶色のブレザーに赤のチエックのスカート。髪は長めで毛先にウェーブがかかり、目はぱっちりとして顔立ちは整つてゐる。どこかで見たことある子だ。

どうやら自転車のチエーンが外れたらしく、戻そうとしているみたいだ。だがあまり自分でしたことないのか、先ほどから四苦八苦している。バイトまで時間はあるが、それ以上に見ていられなかつたため、手を貸すことにした。

「ちょっとといいか?」

「え? あつごめんなさい、道端で迷惑ですよね!」

何を勘違いしたのやら、俺が怒っていると思つたらしい。今度は立ち上がりつて自転車を寄せようとしていた。別にそんなつもりはなかつたんだが。

「いや、そうじやない。何やら苦戦してそだつたから、手伝おうと思つてな」

「え? いいのですか?」

「最初からそのつもりだ。どれ、ちょっと見せてみろ」

彼女の自転車の前にかがみこむ。どうやらただチエーンが外れただけでなく、鋲びたところから切れたらしい。車体とかも見る限り、ずっと使われているようだ。寧ろここまで切れなかつたのが奇跡と言える状態である。

「これは新しいものに変えたほうだいいな」

「え、ええ!? ほ、本当ですか?」

「ああ。まあ道具は一通り常備してゐるし、チエーンは俺の予備を使えばいいか」

「そ、そこまでしていただきかなくとも」

「安心しろ。金や礼ををせびつたりしない、俺がやりたくてやるんだ。それに……」

そうこう話している間に作業は終わり、彼女の自転車は再び乗れるようになつた。ついでに車体も少し魔術でいじり、脆さを改善した。これでもうしばらく乗ることが出来るだろう。

「えっと、ありがとうございます!! あの、お名前は?・」

「名乗るほどのもんじやないさ」

「で、ですが……!!」

「なら今度うちの店に来てくれ。それでいい」

それだけを言つて俺はその場から歩き出す。衛宮剣吾はクールに去るとしよう。

「あの!! 私、島村卯月です!! ありがとうございます!!」

礼を言う彼女に後ろ手を振つて応える。まあもう会うことはないし、あつたとしても

俺が彼女に気付く可能性は低い。向こうからは一発でわかると思うが。まあ、別に後腐れがあるわけでもなし、名を名乗らなくても良かつただろう。



とか思つていた時期が俺にもありました。

文化祭当日。ゲストに招かれたのは、体育館でライブをすることになったアイドルだった。それも二大巨塔のプロダクションの片割れと来たもので、下手なことして失敗するわけにも行かないため、下準備は比較的本気を出すことになつた。で、だ。

その招かれたアイドルつてのが、346プロダクションのニュージェネレーションズとラブライカ、そしてL i P P Sと、これまた大御所ぞろいと来たものだ。流石の俺も少し緊張した。

で、その時声をかけられてようやく気付いたのだが、どうやら俺があの時手伝ったのはニュージェネの島村で間違いないらしい。偶然つて怖いねえ。で、それを知った他のアイドル達に現在質問されている状況だ。特にいろんな資格を持つている新田にとつて、自分より年下の俺がより博識——らしい。俺にそのつもりはないが——のが興味対象の様だ。

「衛宮君はどうやってそれほどの知識を得たんですか？」

「エミヤさんは、ロシア語もしやべれる、のですか？」

「あなた、なかなか面白いわね。フフフツ♪」

「ねえねえ、ちょっと匂いかがせて♪」

……346つて個性的な奴が多いな。

——それではこれより、特別ゲストによるスペシャルイベントを始めます!! まずは

こちら!!

「……どうやらお呼びみたいだ」

「そうだね、じゃあ行つてくるよ!!」

「また後で話聞かせてね」

「卯月、がんばります!!」

そう言い、まずはニュージェネの三人が表へ出る。途端鼓膜を破るような歎声が体育馆に響き渡る。成程、わかつてはいたんだが、やはり実際に見るとでは違うな。世の中、”力”だけが全てでないということが。その証拠に、彼女たちを見る生徒たちは笑顔になつてゐる。

犠牲を最小限に抑えることしかできない俺や父さんと違い、彼女らのような存在が一番必要なのだろう。助かって浮かべる笑顔と、楽しさや幸福で浮かべる笑顔は違う。だが彼女らのような”光”があれば、”闇”もまた存在する。だが自分や世界の”闇”を無理に祓うのではなく、逆に抱きしめる必要があるのかかもしれない。だがその役目は彼女らじやない。その役目は、足を踏み入れている”裏の者”^{ヤミ}の役目だ。

だが今だけは、ひと時の安らぎを得るとしよう。

剣の御子と料理人の卵たち 一ノ皿

遠月茶寮料理学園。

それは日本屈指の名門料理学校であり、「遠月学園」の名で知られている。料理人の虎ノ門ともいえる場であり、入学できたからと言って新旧が約束されているわけではない。そのカリキュラムは非常に厳しく、「そこに在籍していたという履歴だけでも料理人の箔が付く」というものであり、卒業すれば料理界において絶対的地位が約束されるとも言われている。

しかしながら徹底した美食主義者であり、学園長たる薙切仙座衛門の義理の息子である薙切薊による乗っ取りで、学園は混乱状態に陥った。選ばれた者のみが許される食の世界を築くためには娘である薙切えりなの絶対的な味覚が必要であり、薊は彼女を監禁状態にしていた。

幼少のころの刷り込みによつてえりなは薊に反抗出来ないでいたが、彼女の秘書であつた新戸紺沙子や従妹の薙切アリスらの手引きにより監禁場所より脱出し、忌避して

いた人物、幸平創眞の住まう、しかし現時点で一番安全な「極星寮」に避難することになつた。

そして現在、寮生による歓迎の宴が終わつた後、えりなは創眞の部屋にいた。

今まで抱えたものを幸平作の「鶏卵の天丼」を食したときの感覚と共に吐露し、自身の今までの観念が取り払われ、料理に自由が必要と考え始めたところだつた。

「……ねえ幸平君」

「あん？ どうした？」

えりなには疑問があつた。今まで何度か彼の料理する姿や品を見てきたが、彼の料理は形にとらわれないものばかりだつた。そして田所恵ほどではないが食べる人を思うホスピタリティもある。そしてどんなに追い込まれた状況でも冷静に物事を分析し、悪状況を打破するちからもある。

そして他の料理人に不足している彼の強み、『自分に足りないものに向き合う強さ』を彼は既に持つてゐる。そんな彼の料理のルーツが気になつたのだ。

「あなたは、今まで一人で料理を学んできたの？」

「ん？　あー一人ではないかな」

「えつ？」

「俺つてさ、料理の師匠が三人いるんだよ。一人は四宮小次郎先輩でもう一人は親父」

四宮小次郎は知つていて。「野菜レギュム」を中心としたフランス料理を得意としており、野菜を余り食さない欧米人の舌をも唸らせる力量を持つ一流の料理人。「レギュムの魔術師」の通り名でも知られる彼の店に、確かに幸平創真は研修に行つたのだったか。

そして彼の父親。確かに下町で定食屋を営んでいたという。恐らくだが料理の基礎はその父親から学んだのだろう。

「それで、三人目の師匠というのは？」

「ああ、これが変わった人でさ。雪のように綺麗で真っ白な髪をしていたんだ」

三人目の師匠について語る幸平、その顔はとても楽し気にはほころんでいた。もしかすると、その髪の綺麗な師匠というのは女性なのだろうか？

肩の荷が多少おりて少し自分を出しているえりなは、自分が若干不機嫌になつていることに気付いたが、なぜそうなつているのかはわからなかつた。

「へえ、そうなの」

「おう!! しかもなんか色々格言めいたこと言つていたんだ。でもその一つ一つがとてもためになる言葉だつたんだ」

「例えば?」

「こう言つてたな」

そう言つて幸平は右手の人差し指を立て、天井を指差しながら口を開いた。

「師匠が言つていた。『強さにゴールはない。お前も俺も更に高みに昇れる。いつまでもどこまでも』つてな」

「強さにゴールはない……」

それは彼が再三言葉にしている、無限の料理の荒野を進むということだろうか? 何度も負けても、何度も失敗したとしても、その経験を糧に更なる高みへと昇り、さらに遠くの地まで進むというのか。

分からなかつたわけだ。自分は今まで完璧な料理が全てと思っていた。確かに完璧

な料理は食べる人を満足させられるだろう。しかし本当の意味で満足させることはかなわないかも知れない。先ほどの宴でも、料理を作った寮生は私の指示通りではなく独自の研究に基づいた改良でいろいろ試していた。幸平創真は彼らのように分野を絞つていい分より過酷な道を歩むことになり、そして彼はそんな自分の先に臆するどころか楽しんでいる。

勝てないわけだ。自分の価値観が否定されているように感じ、私は狭い世界で満足していただけだったのだ。彼らは彼らの完璧さを目指し、そして料理を楽しんでいる。

「他にはなんて言っていたの？」

「ん？ そうだな、『男はクールであるべきだ、沸騰したお湯は蒸発するだけだ』って言つてた。だから俺はいつでも冷静でいるように心がけてるんだよ」

なるほど、だからどんなに追い詰められた状況でも柔軟に対応できたのか。

と、下のほうが騒がしくなつた。声の大きさからして、どうやら一階の食堂かららしい。しかし先ほどまでの食べ比べによるものではなく、誰か客人が来たような様子だつた。

幸平もえりなも顔を見合せ共に部屋を出て階下に向かう。まだ姿は見えないが、女

性陣が特に騒いでいる声が聞こえる。気になつて二人とも食堂に入ると、そこには一人の男が立っていた。

まず身長は大きく、美作昂に迫るほどの高さである、それでいて体格は程よく鍛えられており、決して威圧感を与えていない。黒を基調とした服装はシャツとベスト、そして靴とズボンというシンプルな格好であり、ベルトには黒い中折れ帽子をひつかけている。

対照的に少しだけ見える肌は白く、長い髪は葉山のように括つてポニーtailにしている。しかしこの男の髪は結つてあつても腰まで伸びていた。

そして特徴的なのはその双眼。その両目は血のように紅い色を湛えていた。料理をするものは時に生き物を殺すことから入るため血は見慣れているが、これほどにまで綺麗な紅は見たことがなかつた。

しかし問題はこの男が何者であるかだ。この学園には世界中から人が集まるが、このような外見の人物はいない。もしかしたら薙切薊の手の者かもしれない。そう思つたえりなは男に対する警戒を強めた。

「あれ？ 師匠どうしたんすか？」

しかし幸平のその一言で、えりなの警戒は解かれた。先ほどまで話していた彼の師匠の話、ということは、この男が彼の三人目の師匠なのだろう。しかしこの男の料理の腕は分からぬ。もしかしたら、彼の精神面における師匠なのかも知れない。

「よう創真。元気にしていたか?」

「ええ、元気つす。師匠は今までどこに?」

「ん? ハツチャケ爺さんの頼みで、ちよいと世界を救いに言つてた」

「マジつすか!? 今度はどんなことが?」

「いやーなんか世界征服を企んでる組織があつてな? 何か仮面をつけてる特撮ヒーローっぽい人たちと共闘したんだが、いやまあこれが疲れる疲れる——」

驚くえりなたちを尻目に、彼ら二人は話を始めた。その内容は荒唐無稽なものであり、到底信じられるものではなかつた。しかし男の放つ雰囲気や見てくれが、その話を信するに値するものとえりなたちに感じさせた。

「つとすまんみんな、紹介するぜ。俺の三人の師匠の一人の……」
「衛宮剣吾だ、よろしく」

「「はあ、よろしくお願ひします」」

「ん？……衛宮だつて？」

自己紹介した男、衛宮の苗字に反応したのは寮母のふみ緒。彼女は寮母でありながら、その人脈や過去は未だなおが多い。そのふみ緒は腕を組みながら、男に近寄つて行つた。

「なあお前さん」

「？ 何でしよう？」

「お前さん……エミヤシロウという男を知つてるかい？」

ふみ緒さんの出した名前に、えりなたちは一様に息をのんだ。ふみ緒の出した名前は、日本人では知らぬものがいない超有名人。日本史上でも最強と言われており、世界の危機を幾度も救つた英雄の名前である。そしてこの時気づいたのだが、確かにこの男と英雄の名前は、奇しくも同じであつた。

「ええ、私は息子ですが。父をご存じで？」

「ああ、やっぱりそうかい。ちょっとした縁での子の料理を食べたことがあってね。ありや遠月の生徒でもないのに、銀や城一郎を軽く超える腕前だつたからよーく覚えてるよ」

「へー、あの父さんがね」

意外にも知らなかつた英雄とふみ緒との関係。衛宮剣吾は知らないが、当時の十傑一席と次席であつた彼らを凌駕するということは、遠月卒業を難なくこなせると考えてもいい。

その息子であり、幸平の師匠ともなれば料理の腕も高いのかもしれない。驚きは一先ずおいておき、寮生は衛宮に料理をせがみ始めた。これから先、衛宮の技術や心の置き方は吸収すべきものと判断できるものである。

「……だがみんなもう夕食を食べたのだろう？ 腹も満たされているはずだが」

「まあいいじゃないかい。デザートでも軽いものでもいいからさ」

「それに、俺も師匠の料理を久しぶりに食べたいし」

ふみ緒と幸平に押し切られる形で、衛宮は渋々と調理台に立ち、簡単なフルーツマ

フインを作り始めた。皆は興味津々な様子で男の調理風景を眺める、が、彼らは工程をすべて見ていたわけではなかつた。

「さて、君たちは全部の工程を観ようとしているが、俺がそうさせないようにしているのは気づいているだろう?」

「え、ええ」

「はい」

「……」

調理の手を緩めず、そのまま口を動かしている。寮生やえりなは衛宮の手際の良さに感心し、また腕の高さに舌を巻いていた。そして彼の行動に疑問も感じていたため、素直に彼の質問に答えた。だが弟子である幸平は問い合わせがわかつているのか、表情を変えてなかつた。

「答えは簡単、『誰にもわからない様に隠し味をつけるのは楽しい。だが、それを見つけるのはもっと楽しい』からだ」

「「!?!」

答えを聞いた子供らは、驚きに目を見開いていた。言われてみれば、確かに合点がいく答えたのである。そしてえりなは、幸平の今まで作ってきた数々の料理を思い出していた。彼の料理は成程、審査員や観客が思いもよらぬ隠し味をつけ、しかもそれを見つけた彼らは驚きつつも、楽し気な表情を浮かべていたのだ。

作っていた簡単なお菓子をオーブンに入れたとき、衛宮は閉ざしていた口を再び開いた。

「なあ創真、質問だ。食事とはなんだ？」

「え？　うーん……生きるために必要で、楽しむもの？」

「近いな。『食事は一期一会、毎回毎回を大事にするんだ』」

「へえー」

「そしてみんな覚えておくんだ。料理の全てに言えることがある。それは『どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だ』」

彼がそう締めくくつたとき、オーブンからマフィンが焼きあがつた音がした。彼はそれを危なげなく取り出すと、一つずつ更に乗せ、一人ひとりに配膳した。大きさは小さ

めなため、女性でも一人で食べられる大きさである。

「さあ、召し上がり」

剣の御子と料理人の卵たち 二ノ皿

差し出されたマフィンを、全員が一口含んだ。瞬間、全員の顔がほころび、何人かは腰が抜けてへたり込んだ。剣吾はその様子を見て満足そうな表情を浮かべている。

「さて、何か分かつたことはあるか？」

全員が完食して一息ついたとき、剣吾は問いを投げかけた。そこで皆は、今しがた食したマフィンについて思い出した。ふわふわとした生地に混ざるサイコロ上の果物。使われていたのはリンゴだけであり、香辛料はシナモンだけと言うもの。要するに隠し味なんて含まれていなく、フルーツマフィンの一つ、アップルマフィンの最も基礎的なレシピだけで作られていたのだつた。

「……隠し味なんて、されてない？」

「御名答。君、名前は？」

「難切えりなです」

「えりなちやんね」

一瞬勘違いと思われていたが、味に対して絶対的な正確さを持つえりなが結論付けたので、隠し味がないことが確定された。そして皆は、弟子である創真でさえも驚愕した。遠月の生徒は厳しいカリキュラムに残るために、様々な創意工夫を凝らしている。今この寮にいる全員もその厳しい選考基準をクリアするために、自らの料理に創意工夫を仮名せてきたのである。

しかし、この男はそんなことは一切せずに、基礎の基礎の部分で彼らの技量を超えたのだった。ならばこの男が本気を出せばどれほどの料理が作られるのだろう？

「それより、今日は客人のくる予定はありますか？」

「ん？ いや、ないはずだよ」

しかしほんわかとした雰囲気から一転、剣吾の纏う空気が鋭利なものになつた。先ほど調理していた時とは異なる、触れれば切り裂かれるのではと錯覚する空気であつた。

寮生は知らないが、彼は小学校に入る前から非常識の中に身を置き、殺し合いを初めて体験したのは小学校低学年の時。そのような世界にいなかつた寮生は、彼のそれが殺氣というのがわからなかつた。勿論ふみ緒も感じたことはないが、そこは生きてきた年数が違うため、何事もなかつたように振る舞つていた。

「成程、なら今玄関にいる男は招かれざる客、というわけだ」

そう言うや否や、瞬きした瞬間には厨房から消えていた剣吾。そして次の瞬間玄関から誰かが倒れる音が響いた。驚いた寮生とふみ緒は急いで玄関に向かい、そして再び驚愕に顔を染めた。

玄関に倒れていたのは薙切薊で、剣吾は床に彼を取り押さえていた剣吾。そして次の瞬間玄関から誰かが倒れる音が響いた。驚いた寮生とふみ緒は急いで玄関に向かい、そして再び驚愕に顔を染めた。

「……薙切薊。成程、父さんの言つていた通り、クズだな」

「貴様……こんなことをしてただで済むと思つてゐるのか？」

「ほう？　俺を脅すのか？　あんたは確かに年上だろうが、井戸の中の蛙にどうこうされるほど俺は弱くないぞ？」

普段強気なえりなは愚か、薊と関係ない人間でも恐怖で固まる空気を受けても、剣吾は臆するどころか更に威圧を高めていた。丸井や吉野、田所は既に空気に呑まれて氣絶しており、榎や伊武崎も気絶はしないものの後退り、一色や創真、ふみ緒は表情は変えないものの、汗を多量にかいていた。

そんなことは知る由もないというように、薊は立ち上がりつて剣吾と向き合う。真正面から睨みつけて剣吾を威圧するが、当の威圧されている本人は、まるで興味がないとも言いたげに小指で耳を穿つていた。

「何だっけ？　美食と認められないものは全て餌？　餌を提供する店は全て潰す、だつたっけ？」

こともなげに放たれた言葉に、薊は表情を変えずに驚愕していた。自分の計画はまだ発表しておらず、ましてや最終計画である彼の述べたそれは、自身と信頼できる数人しか知らないはずのこと。何者かも知らない、生意気な小僧風情が知つているようなこと

ではないのだ。

「……あんた、仮にも料理人だろ？ それに調べたが、あの娘っ子の舌を作り上げたのはあんただつけ？」

「そうだが？ 完璧な美食を作るには完璧な味覚が必要なのだよ。そして我々が目指す世界にはえりなの舌が必要なのさ」

「……それで味の劣る料理を捨てさせたと？」

「どこから聞いたか知らないが、美食でもない餌を捨ててなにが悪い？」

薊の放つたその言葉に、何かが切れる音をその場にいた全員は効いた。同時に寮が揺れているような幻覚に全員が襲われた。そしてその発生源である剣吾は、表情をなくして薊を見つめていた。

幻覚がいつたん收まると、剣吾は人差し指を天上に向けて口を開いた。

『男がやつてはいけないことが二つある。女を悲しみで泣かせることと、食べ物を粗末にすることだ』!! 貴様は料理人の風上にもおけない最低な部類の輩だ』

「……なに？」

「そして、『子供は宝物、この世で最も罪深いのは、その宝を傷つける者だ』。俺にとつてのあんたは、最も罪深いものだよ」

「君一人に言われたところで……」

反論しようとする薊だが、剣呑の空気に呑まれ、その声も小さいものしか出なかつた。

「そして、遠月のブランドで食の世界を統一するとか言つていたな？　しかもあんたが美食と認めたものののみで構成された」

「何か問題があるのかね？」

「大有りだ。確かにこのブランドで統一された料理はおいしいだろう、味の組み合わせだけ見ればな。だが勘違いするなよ？　『本当に美味しい料理というのは、食べた人間の人生まで変える』。そして『本当の名店は看板やブランドを出さない』んだよ」

「偉そうに、料理人でもない君が何を言うかと思えば。私が学生時代にあつたあの男を思い出すよ。才波城一郎先輩の顔に泥を塗つたあの男に」

薊の言葉を聞いた創真是、突然一人の男のことを思い出した。まだ彼が幼く包丁も握つていなかつた頃、師匠と一緒に一人の男が幾度か実家の定食屋に來ていたのだ。当

時は何者かは分からなかつたけど、親父が師匠と言つていたのを覚えてる。ということは、親子そろつて師匠の家系に弟子入りしていたというわけだ。この前聞いた話だけど、親父は学生時代に師匠に負け、それまでの料理観が崩されると同時に、新しい扉を開くことが出来たと言つていた。

「はつ。『刃物で人を幸せにできるのは料理人だけ』だよ。一度あんたの料理を食べたことがあるが、ありや味がいいだけの粗悪品だ、食材にも食べる人にも失礼な代物だな」「言わせておけば……」

考え方をしている間にも話は進んでく、が、進むたびにあれほど威圧を感じていた薊から迫力を削いでいく。そして幾分か時間が過ぎたとき、薊は背を向けて帰つていつた。

険悪な雰囲気がなくなつたことによつて全員が大きく息をつき、気を失つていた者も目を覚ました。当事者の剣吾は何やら思案している風に顔を顰めており、顎に手を当てていた。

とりあえず汗もたくさんかいたため、食堂で全員揃つてお茶を飲む。水分が不足した体にはお茶が染み渡つていく。しばらく無言でお茶を啜つていると、ふみ緒が口を開いていた。

た。

「そう言えば聞いてなかつたね。お前さん、どうしてここに来たんだい?」
「ん? ああ、俺はとある人物から依頼されてきたんだよ。あの男の動きを妨害しろつ
てな」

「「「「はあ!?」」」

唐突に告げられた目的に対し、寮生は全員声を上げた。

「師匠、どういうことだよ!!」

「まあ落ち着け創真。いつも言つてるだろ? 『男はクールであるべき』と」

「落ち着いていられるか!!」

「まあそう急くなつて、今話すから」

そういうつて剣吾はお茶を一気に呷り、口を開いた。

聞けば数年前から世界中で薊に関する話は聞こえていたらしい。彼自身はその話に
関与する気は無かつたらしいが、たまたま出会つた幸平城一郎に協力する形になり、こ

の問題への対処をすることになったという。元々城一郎は所謂「表」の世界の人間であるため、集められる情報に限りがある。しかし「裏」の深い闇にまで関わっている剣吾なら、より多くの情報を仕入れることができ、薊に対する策も増やすことが出来る。

そう考えた二人は銀ともコンタクトを取り、それぞれ行動を開始した。結果、城一郎や銀では到底入手できない情報も仕入れることができ、今計画の次の段階に移行しているらしい。

「んでその計画つてのが、お前たちの料理スキル全般の底上げだ。恐らくこれから今までよりもさらに酷い切り捨て、要するに反乱分子の肅清があるだろう。八百長なんてなんのその、是が非でも邪魔者は消していく」

「そのための底上げだ。ここは料理学校、八百長とかがあるとはいえ、正当性を示すために料理で落としてくる。その八百長さえも跳ね除けるほどの技術を、俺が滞在するこの一ヶ月で行う。お前たちも、このまま今までの自分の道を否定されるのは嫌だろう?」

剣吾の問いかけに対し、寮生とえりなは間髪入れずに肯定する。薊の目指す世界は耳障りは良いかもしれないが、停滞することと同義である。自らの分野のまだ見ぬ可能性を模索する彼らにとつては、到底受け入れられるものではなかつた。えりなも、自分の

忘れていたものを思いださせ、知らなかつた世界を示し、新たな目標を見つけさせてくれた寮生や親友の緋沙子のために恩返しをしたいと、父の影におびえる自分から脱却したいと思つていた。

全員の反応を見ると、剣吾は満足そうに口の端を吊り上げた。

「答えは聞いた。なら明日から。早速特訓に入る。講師は俺と……」

剣吾が立ち上がると同時に、食堂にまた一人男が現れた。その男の存在に誰もが疑問符を浮かべていたが、創真はその人物の登場に驚き、えりなや丸井、そして一色は顎が落ちるほど口と目を見開き、ふみ緒は信じられないものを見る目で男を見つめていた。

その男は剣吾そつくりの白い短い髪をしており、オールバツクにして立たせていた。肌は対照的に浅黒く、肉体は鋼と形容してもいいほどに引き絞られている。何より特徴的なのはその眼光、鋼の様な色の瞳は、まるで鷹のように鋭い眼をしており、細められている。

「紹介しよう。今回特別に話を受けてくれた俺の師匠で俺の父親、衛宮士郎だ」

自らの世界を護るために、「鍊鐵の英雄」と「剣の御子」がここに集つた。

剣の御子と料理人の卵たち 三ノ皿

「衛宮士郎つて……」

「あの世界各地で活躍していた」

「最近音沙汰なかつたけど……」

突然の来訪者に生徒は愚か、年配者であるふみ緒まで動搖を隠せていない。男はぐるりと部屋の中を見渡すと、創真に目を止めた。そしてしばらくじつと見つめていると今度は剣吾に近づき、その頭に拳を落した。

「いつて!? 何すんだクソ親父!!」

「何するんだ、だと? 僕は弟子の料理を見てほしいと頼まれたから来たのだが、何だこの状況は? 僕は一切説明を受けてないが?」

「あれ? 言いてなかつたつけ?」

「……あとで母さんたちも交えて○☆H A ☆N A ☆S H Iするか？」
 「それだけは勘弁してくださいお願ひしますこの通り!!」

突然男に土下座をする剣吾の様子に、極星寮のメンバーはついてこれなかつた。創真に至つては、師匠のみつともない姿を目の当たりにして、脳内処理が追い付いていない状態だつた。

男、衛宮士郎は一つため息をつくと、生徒たちに向き直つた。

「改めて、衛宮士郎だ。まあイリヤの書いた本とかニュースで知つていると思うが。それと幸平創真君、君の話はよく聞いている」

「え？　俺のつすか？」

突然名指しをされた創真は、思わず素つ頓狂な声を上げてしまつた。小さいころに見た覚えがあるとはいへ、ほぼほぼ初対面の相手である。そんな相手が自分の話を聞いているとなれば、驚かないのも無理がない。だが男は構わずコートを脱ぐと、手近の洗面台で手を洗い、調理室に向かつた。一足遅れる形で他の面子が厨房に入ると、すでに何か作つてゐる士郎の姿があつた。

「これは……乳粥？」
ちちがゆ

香りを嗅いだえりなが言葉を漏らす。乳粥は苦行中の釈迦にスジャータが捧げ、命を救つたという話で有名であり、腹にも優しい料理である。なぜ急に乳粥を作り始めたか知らないが、彼の調理工程は基本的なモノばかりで、隠し味も何もしていなかつた。

「あの、何故乳粥を？」

ふみ緒の次に年配——と言つても創真たちの一つ上だが——が士郎に聞いた。すると调理の手を緩めずに、口だけを士郎は動かした。

「先程息子がアップルマフィンを作つたろう？ 匂いでわかる」

「は、はあ……」

「寝る前に何か食わせるのもなんだが、熱した乳は生き物を安心させる効果がある。成分ではなく、本能的な部分に働きかけ、母を思い起させ安堵するのだ。それにより、今日の疲れもあるから睡眠効果を促すのだよ」

「「「成る程」」

説明をしいている間に料理が出来上がり、全員の前に小さな椀一杯分の粥が置かれた。全員がそれを口にすると、不思議な感覚が全身に広がった。剣吾のマフィンがリング園を走り回るイメージなら、彼の粥は今や遠い昔のことである、母の腕に抱かれながら子守歌で眠るイメージだつた。剣吾も皆に混じつて粥を口にし、非常に悔しそうな顔をしていた。

「……まだまだか」

「お前は和洋折衷なんでもいけるが、絞つたことはないだろう？　俺の得意分野は和食だが、まだまだ負けんよ」

「「「これで得意分野じゃないの!?」」

士郎の発言に全員が衝撃を受けた。十傑の二人の腰を抜かせ、過去に十傑の主席と次席を負かした男の一品が、実は得意分野ではなかつたとくれば驚くのも当然だろう。ただふみ緒一人だけが納得顔をしていた。

「詳しい話は明日にしよう。今日は色々とありすぎたようだからな」

士郎の言葉を皮切りに、次々に一年生は船を漕ぎ始める。唯一の二年である一色と剣吾、そして士郎とで全員を寝室に運ぶと、一色を交えて話し合いを始めた。

基本的に一色は中立の立場を貫き、このまま十傑に身を置くらしい。ただ陰で極星寮メンバーや他の彼らと仲のいい生徒のバックアップを行うとのこと。ただ薊の手腕は計り知れず、自分のやり方もいつばれるかわからないとのこと。

「それでいい。生徒のスキル上げや保護は俺たちで行うから、君は少しづつ奴の情報を俺たちに教えてくれ」

「監視とかあると思いますよ？ 大丈夫なんですか？」

「俺たちの仕事柄、諜報は普通でね。君の情報と俺と息子の調査、そして城一郎たちの情報があればなんとかなる」

「気を付けなよ？ 薊が何をしてくるかわからないからね。アンタらはまだ若いんだから、死ぬようなことになれば……」

「心配はないよ、ふみ緒さん。そこのチップラやヤクザ、ギャング程度なら拘束されない限り俺たちはどうとでもなる」

まるで銃器で狙われても問題ないとでもいう言い様に、ふみ緒は少しばかり呆れた。だが彼らのことを見るとそれが本当に思えてくるため、ふふみ緒は苦笑を漏らした。今後の方針も決まつたため、衛宮親子は客室をあてがわれて就寝した。

次の日からの特訓は阿鼻叫喚の地獄絵図だった。創真もゲテモノ新作を作る余裕もなく、えりなを含めた各人がそれぞれの得意分野のプライドをへし折られた。特訓参加者の郁美やアルディー二兄弟、薙切アリスや黒木場もその例外ではなく、次々と衛宮親子によつてプライドをへし折られた。

「おいおい、そんな調子だつたら切り捨てられるぞ？」

「もう少しやれると思っていたが、いやはや、まだまだ子供の集まりの様だ。期待して損したか」

「「「ツ!」」」

しかしへばつているところを親子に指摘され、更に神経を逆なでするような発現に反応する生徒たち。特に創真と黒木場は、衛宮士郎の声が葉山にそつくりであることも加え、敵意をむき出しにして立ち上がつた。その様子に親子がしたり顔をしていることな

ど露知らずに。

「上等だあ!! 手前工に嫌というほど俺の料理を味わわせてやる!! 今に手前工の口から謝罪を言わせてやるよ!!」

「やつてみろ、世界の広さを知らない小僧どもが」「――ツ!!」

「意気込むことはいいが、調理前に手を洗え。床を触った手で食材に触れる氣か、愚か者が」「今からやるところだ!!」

反抗したり自分なりに美味しい料理を作つてもあしらわれ、折れそうになつたら挑発される。その繰り返しで生徒たちは疲れ果てても動かされていた。因みに作つた料理は全て一人分のため、小分けして皆で食べれば満腹にはそうそうならない。そのため食座や料理が捨てられるようなことはない。

新体制発足から一日、彼らは少しづつ自分たちの実力が上がつていつている実感がわかないまま過ぎ去つていつた。

剣の御子と新たなる時代の産声

この街の名前は「風都」、その名に違わぬ心地の良い風の吹く街である。表での仕事のために一応私立探偵業をやっている俺は、とある調査のためにこの街を訪れていた。なんでも最近妙なものがこの街で出回っているらしく、俺に依頼に来た少女も自身の知り合いが巻き込まれたと来ただものだ。胡散臭いことこの上ない。

この街に来て聞き込みを始めて一週間、何度か奇々怪々な場面に出くわした。魔術師として活動する都合上、どうしても死徒やら人外との戦いは避けることが出来ない。だがそれらとは全くの異質、まるで後天的に何かの道具で一時的に怪物になつたかのような奴らと戦闘をした。いずれの怪人も逃げ出して捉えることが出いなかつたが、警察の発砲による銃弾を受けても火花とちよつとしたダメージだけで済んだのだ、並みの攻撃ではどうにもすることが出来ない。

産に買つていこう」

とある屋台にて昼飯にラーメンを食べていたのだが、これがなかなかうまい。でつかい風車を模したナルトが乗っているんだが、見た目の奇抜さも合わさつていける。無心で麺を啜つていると、近くで大きな爆発が起こつた。この一週間で何度か耳にした音であり、目にしたことである。最後の一口を腹に収め、料金を払い、強化した体で急いで現場に向かうと、予想通りそこにはこの一週間で繰り返し見た怪人がいた。

だが昨日まで違うことが一つあつた。怪人の前には一人の男が佇んでおり、腰に妙なベルトを撒いていた。

《SKULL!!》

そして何やらUSBメモリのようなもののボタンを押すとベルトに差し込み、何やら変身した。それは数年前、とある世界で共闘した仮面の戦士たちに意匠が似通つていた。『仮面ライダー』と呼ばれていた彼らに。

『さあ、お前の罪を数える』

骸骨の様な仮面の騎士はそう言うと、怪人に向かっていった。どうやらあの怪人はこの戦士の攻撃を食らうらしく、銃や打撃の応酬に苦しんでいた。戦場は街中からどこかの広い土地へと移動し、怪人はトラックの上に、戦士は専用車両の上に乗つて一騎打ちの形となつた。

『SKULL!! MAXIMUM DRIVE!!』

何やら戦士がメモリを操作して銃に装填すると、高密度のエネルギー弾を数発トラックに撃つた。その結果トラックは横転し、怪人はトレーラーの下敷きになつた。その後、トレーラーの爆発に巻き込まれる形で怪物は消え、その場には破損したUSBメモリのようなものと、不快感を誘発する肉の焼ける匂いが充満した。

「お前さん、誰だ？」

その時、変身を解除しただろう壮年の男性が俺に近づき、話しかけてきた。そして彼はいつでも俺を排除できるよう、警戒を解いていない。

「初めまして。風都の隣町、冬木にて私立探偵を営んでいる剣衛^{つるぎまもる}です。今回は事務所に依頼された案件のために、この風都に訪れたのですが」

俺はここで言葉を切る。ついでに言えば「剣衛」というのは偽名だ、本名は「衛宮剣吾」である。男は暫く疑い深そうに俺を見ていたが、やがて俺に「鳴海壮吉」と名乗つてきた。これは俺と異なり、どうやら本名らしい。

鳴海の話によると、どうやらUSBは「ガイアメモリ」と呼ばれるものらしく、非常に危険な代物らしい。「地球の記憶」と言うものをメモリという入れ物に収め、相性の高いものを体に入れると相応の力を持つて「ドーパント」となる反面、毒素で最終的には廃人、死に至るらしい。鳴海自身も、「ロストドライバー」というものを介して使わない限り、体がメモリの毒素でやられてしまうようだ。

「それで、君は何の調査でここに？」

「依頼した人の知人がこの街で消息不明になつていましてね。捜索はしていましたが、今しがた亡くなつたあの怪人の様でした」

そう、今回捜索対象だつた人物は、たつた今死んだ怪人だつた女性だ。どうやらガイアメモリに手を出し、彼によつて引導を渡されたらしい。これでは依頼は失敗と判断するほかないだろう。

「成程、彼女だつたのか。だがすまない、彼女はこの街を泣かせていた故、私も容赦が出来なかつた」

「お気になさらず、どうやら俺ではこの怪人に対する対処法は、まだまだ少ない。専門家に任せるのが早いでしよう」

「わかつた。私も依頼を達成したばかりだ、よければ何か御馳走しよう」

せつかくの誘いを断るのも憚られたため、彼の事務作業を待つた後、とあるイタリアンレストランに赴くことになつた。なんでもそこの店は食事もコーヒーも格別に上手いらしく、実際に食べると彼の評価に違わぬおいしさであつた。

食事を終え、家族への土産も少量購入すると、俺は風都を発つ準備をした。そして荷物を持つて帰途についていると、一人の小さな少年が目に入った。どうにも普通じやない。服は汚れ、顔も多少煤けている。放つておけなかつた俺はその少年に近寄つた。

「坊主、何をしてる」

「……なんでもねえ」

「そうか。余計なお世話かもしけんが、家には帰らんのか？」

「……家には誰もいねえ。親父もお袋も、ドーパントに殺された」

「そうか」

この少年はドーパント事件の被害者、両親がいないということは孤児なのだろう。そして孤児院にもいかず、親戚の許にもいかず、こうして隠れて生きているというわけか。

「お前さん、これからどうするんだ？」

「分かんねえ。でも俺はこの街が、風都が好きだ。仮令両親が殺されても、この街に生まれたんだ」

「そうか。ならこの街に巢食う悲しみがあるとしよう、どうしたい？」

俺の問いかけに少年は顔を上げ、汚れた身なりとは対照的に綺麗に輝く目を俺に向か
た。

「決まつてゐる。この街を泣かせるのは許さねえ。仮令何年かかるうと、俺はこの街を泣かせる悲しみを断ち切る!! 親父たちがそう願つたように、俺は俺のやり方で!!」

その目は絶望してなかつた。この年齢、恐らく小学生ほどの少年が、両親の死に直面しても耐え忍び、寧ろ同じ目にあう者達を減らそうという希望を携えていた。

一言で言おう、俺はこの少年が気に入つた。

「そうか。だが今のままで無理だ」

「うるせえ!」

「だからこそ、俺が少しだけ鍛えてやる。どうだ? 一時的にこの街を離れることになるが、その代わりお前は『力』を手にすることが出来る」

そう、「力」は「力」でしかない。手に入れた「力」をどのように振るうか、それが一番重要なのだ。

「本当に、本当にあんたについていけば、俺は『力』を貰えるのか?」
「どのように使うかは君次第になるがな」

「その力で、俺の故郷を護れるようになるのか？」

「それも君次第だ」

さあ、どうする？

「……決めた、あんたに付いていく」

「そうか、なら必要なものを揃えろ。すぐに行くぞ」

「おう！」

少年は元気よく返事をすると、本当に必要なものだけを持つてきた。どうやら衣類何着かと、やはり小学生だからか勉強道具を持つてきた。まあ彼もそれが大切だからだと思い、持ってきたのだろう。それを俺は否定しない。ついでに家に電話をかけ、妻子に養子を引き取る旨を伝えた。妻は快く承諾し、娘は弟が出来ると喜んでいるそうだ。

そして少年が自分の家で風呂などの身支度を整えた後、養子縁組の申請を済ませるために先に風都の役所に向かうことになった。荷物は申請後に調節電車に乗るために俺が手に持つている。

「そうだ少年、大切なことを忘れていた」

「あん？ なんだ？」

「少年、君の名前は？」

「俺か？ 俺は左翔太郎、将来風都を泣かせない男になる!!」

「良い夢だ。俺は衛宮剣吾、公には剣衛と名乗っている。そして俺は……」

——俺は、魔術使いなんだ。

——へえ、すごいな

剣の御子と夢見る乙女たち

母が今度出版する本について編集者と話をするとかで、オレは母について東京まで来ている。紅葉は冬木で他の人と留守番しているが。まあ父さんは今海外にいるし、凛ねえは新しい命がお腹にいるとかで飛行機には乗れないで、結構うちの家族は好き勝手にやつてる気がする。

そんな考え方をしていると母が戻ってきた。満足そうな顔から察するに、どうやら希望通りの内容になつたらしい。母は今回ギリシャ神話を書き直していくようだけど、この前内容をみたらヘラクレスの話ばかりだった。というかヘラクレスの話で一冊分作り上げてしまつてた。まあそれでも編集者が了解を出したのは、その内容が良かつたからだろう。

「さあ、ご飯食べて帰りましようか。剣吾は何食べたい?」
「んく……」

「あ、何でもいいは無しね♪」

「……」

さて、そう言わると本格的に迷ってしまう。さて、どうしようか。ラーメンは昨日食べたし、東京で有名なもの。今新宿にいるから新宿で有名なものを食べたいというのは、子供だろうが大人だろうが同じだろう。まあうちの家族は父さんがあらゆる分野の一流シェフと同等の腕を持っているせいか、ちょっと舌が肥えている傾向がある。そんな舌を満足させ得る店となると。

「……あつ」

「どうしたの？」

「駅の近くでケバブ売つてた」

「ああ、そういうえばそうね。そこにしましようか」

「ん」

そう、食べ歩きの様な形になるけど、新宿駅の近くにケバブ屋があるので。見た感じと香りからして、美味しいと直感が告げていた。母もオレの意見には賛成の様で、そこ

で食べてから電車で帰ることになった。

今回の東京訪問は、自分にとつて初めての経験だった。新宿しか今回は行動していないが、もう少し大きくなつたら自分でいろいろと散策しよう。

そう考えながら歩いていると、母の携帯に電話がかかってきた。どうも原稿に何かあつたらしく急遽来てほしいとのことだそうだ。ただ現行の紛失とかそういうしたものではなく、担当編集とその上を交えた話らしい。

流石に仕方がないと思つたのか、母は本社に足を向けた。オレは近くの公園で待つことになり、一人ベンチに座つて他の遊ぶ子供たちを眺めていた。まあ一応俺ならそこらの暴漢程度は軽くあしらえるため、母も信用して一人にさせたんだろう。しかしこう八歳とはいえ、流石に魔術使用込みで大人以上の力を使うなど、傍から見れば異様の一言かもしれない。魔術の使用は控えるか。

なにもせぬまま、ただただぼうつと目の前を眺める。手に持つ水筒の中身もなくなり、本格的にすることがなくなつた。目の前で遊ぶ子供たちも親に連れられ、今いるのは小さな女の子とその弟だけである。女の子のほうはもしかしたら、紅葉と同年代かもしれない。そのうち弟のほうが駆け出し、公園からでた。姉らしきほうもそれを追うよう公園から出ていくが……嫌な予感がする。

二人の後を追うように公園を出ると成程、予感通り車が猛スピードで走るのが見え

る。その向かう先には先程の小さな少年。姉のほうは車に気付いているが、弟のほうは気づいていない。このままだと少年は助からないだろう。

……仕方がないか。

「——強化開始、——属性噴射」

ドライブ・ワン

エンチャント・ブースト

魔術回路が起動し、全身に魔力が張り巡らされる。足の裏から風が渦を巻き、背中から風が噴射される。それによつてオレは爆発的にスピードが上がり、他の人から見ればオレが一瞬で少年の許に移動したように見えるだろう。車の運転手も同様に見えているはずだ。

だがそれでも少し遅かつたみたいだ。オレが少年の許についた時には、彼を抱えて離脱するするには遅すぎた。このままではオレは助かつてもこの子は助からない。そしてこの子の姉に消えない傷をつけてしまうかもしれない。

だからオレが取れる方法はこれしかないわけで。

「——鋼の重鎧、——限界突破!!」

メタル・アーマー

マキシマムドライブ

全身を限界を超えて強化し、更に鋼で強化に補正をかける。紅葉以外の家族全員からこの魔術は禁止されているが、今は緊急時ということで目を瞑つてほしい。両足を踏ん張り、ブレーキを掛けない車を両手で支え、その勢いを完全に殺す。道路に少し足がめり込み、車のフロントがへこんだが。まあちょっとした犠牲だろう。そこでようやく気付いたのか、車はエンジンを止め、中から運転手が出てくる。如何にも都会のヤンキーという風貌だが成程、携帯で電話しながら運転していたのか。

「おいガキ、お前人の車に何してくれてんだ？」

「……よそ見していたのはあんただろう。そのせいで人の命が一つなくなるところだつたんだぞ？」

「はあ？ 正義の味方気取りかよガキ。あゝあ、こりや弁償もんだな。どうしてくれんだよ」

「知らん。少年、大丈夫か？ 怪我はないか？」

オレは運転手から目を話し、後ろにいる子供に話しかけた。姉のほうもようやく追いつき、今は少年を抱きしめている。

「う、うん。大丈夫……だよ」

「お兄さんの……その……足が……」

姉のほうが自分の足を見て顔を青ざめさせている。ああ成程、オレの足がおかしなことになつていてると思つてしまつたのか。心配ご無用、こう見えて道路に刺さつてただけで中身はどうにもなつていない。オレはそのまま足を引き抜き、道路に立つた。そこでようやく安心したのか姉弟の顔色は戻つたが、また恐怖に染まる。視線の先は運転手のヤンキー、まだ何やら騒いでいる。

「ガキい!! 無視してんじやねえぞ!! つべこべ言わずに弁償しろや、親でもなんでも、
借金でもしてなあ」

「……阿呆が」

「あん?」

「君たちは早く帰るといい。これはこちらの問題だからな」

少年たちに帰るよう促し、改めてヤンキーに向き直る。なるほど、見れば見る程何も考えていないことがうかがえる。現に周りに野次馬がいることも気づいていないし、何

人かが携帯を操作しているのも確認できる。

何よりも一つの命を奪うところだつたというのを理解していない。それが一番オレの怒りを誘つた。

「おい、聞いてんのかガキイ!!」

「……オレに絡むのもいいですが、周りを見ましようよ」

「んだとお？ ……あ？」

「今の状況はどう見てもあなたが加害者ですし、それにオレがどうにかしなかつたらあなたは殺人罪も加わつてましたよ。道路交通法違反以外にね。携帯で話しながら運転つて何を考えてるんですか？」

「……てめえ」

「そもそもこのような事態になつたのはあんたに原因があるでしょ？ オレ達が責められる謂れはないですよ」

「……生意気言つてんじやねえ!! 覚悟しろやクソガキ!!」

俺も生意気言いすぎたのか、目の前のヤンキーが腕を振り上げる。近くで悲鳴が上がる。どうやら先ほどの少女たちはまだ帰つておらず、こちらの様子を伺つていたよう

だ。はやく帰れば嫌な光景を見なくて良かつたのに。そんなことを考えているとヤンキーの姿が目の前から消え、代わりに地面で何かが呻く声が聞こえた。勿論俺は何もしていない。

「全く、トラブル体质なのはシロウ譲りかしら？ 剣吾、説明してくれる？」

ヤンキーを倒したのは我が愛すべき母。本人は戦闘は不得意と言つてゐるけど、最低限自衛するために合気道を修めてゐるというとんでも母親。オレはその母親に促されままにこうなつた原因を話した。ただし魔術を使つたところはぼかしてだけど。

母もオレが魔術を使つたのを察したのか、その場とヤンキーそして野次馬と件の姉弟と視線を移していく。そして最後にヤンキーに目を戻す。ヤンキーは母を見て何やら怯えてゐるようだ。まあ仕方がないだろう、今の母は父さんが逃げ出すほど怖い状態だから。

その後、警察も交えてお話をし、結局ヤンキーはお繩になつた。どうやらそのヤンキーは以前にも別のトラブルを起こしていたらしく、今回で完全に積んでしまつたらしい。まあ悪いことはするべきではないな。

因みにあの姉弟は家族と共にオレ達にお礼を言い、次に東京に来ることがあつたら案

内すると言われた。姉弟とも互いに自己紹介をし、連絡先も交換することになった。
まあ正確に言えば、連絡先を聞かれたから教えただけだけど。



そんなことがあつたのが十年前、そんなこともあつたと思い出しながら目の前を見る。

ここは東京のとある繁華街。少し個人的な用事のために、この電気やゲーム系のものがたくさん売っているこの街を訪れたのだが、目の前にいる人物たちから話しかけられ

たのだ。そこにはモジモジしながらせわしなく視線を動かす少女と、その隣に少女に似た少年が立っていた。彼女らの風貌は幼さが残るもの、あの頃から成長している様子がうかがえる。

「……あの」

おつと少年に話しかけられた。意識を戻さねば。

「……オレ達のこと、覚えてますか？」

ああ。

「……覚えているとも、あの時は怪我がなくて良かつたな。優君」

「ツ?
はい!!」

「それに君も、あの時と比べて綺麗になつた。好きな歌でも有名になつていてるみたいだ
しな、千早さん」

「あ……はい!!」

本当に大きくなつた。まあまさかここで会うとは思わなかつたが、恐らく姉のほうは休みなのだろう。彼女は確か、今はアイドルとして活動していたはずだからな。彼女の名前は今やテレビでは聞かない日がない、トップアイドルと言つても過言ではないだろう。あの事件以降ちよくちよく連絡は取り合つていたが、こうして顔を合わせるのは初めてだつたはず。

「……それにしても、よくオレを覚えていたな」

「命の恩人ですから」

「弟の恩人ですから」

「……そうか」

あのときは後先を考えずに行動したが、その結果救われた者がいるのも事実か。なんだか少しだけこそばゆい。思えばオレが率先して誰かを助けたのも、あれが初めてだつた気がするな。

「あの!!」

「ん？ どうしたんだ、 千早さん」

「千早でいいです。あの、この後時間はありますか？」

「用事は終わらせたから特にないぞ」

「なら……この後オレ達と一緒に食事はどうですか？」

「久しぶりで……いろいろとお話ししたいですし」

さて、食事の誘いか。まあ用事はもう終わっているし、特に急にやることもないから大丈夫だろう。早く帰らなければならない理由もないし、受験も早々に終わって特にやることもないしな。ここは彼女の厚意に甘えるとしようか。

「……ああ、ご一緒させていただこう」

「はい！ よろしくお願ひします！」

「おいおい、こちらがお願ひしているのに」

余りにも堅く緊張している姉、千早に弟の優と共に苦笑を漏らす。まあ電話やスカ○プ越しに話しても、けつこう礼儀正しいというか堅い感じがあつたからな。生で顔合わせたらそりや緊張するか。オレ達は苦笑したまま、如月姉弟先導の許、繁華街に繰り出

していつた。

余談だが、道中彼女の同期に何人も出くわし、その度に彼女は揶揄われて顔を真っ赤にしていたことを記そう。その顔がちょっと可愛かつたことも。

剣の御子と正義の味方達

「ガアアアアアアアアアアアア!!」

商店街近くの一角で若い男の雄叫びが響き渡る。声をあげた少年は、何やらドロドロとしたヘドロのようなものに飲み込まれており、それに必死に抗っている。特異能力だほうも意思があるのか、少年を取り込もうとウニョウニョ動いていた。その周りには野次馬に混じり、妙なスースを着た人が何人もいたが、誰も手を出せないでいた。

「成程、この世界はヒーローが仕事として存在しているのか。まるで虎徹さんやバーナビーさんのようだな」

とはいって、彼らの使っている力はどうやらNEXTとは別らしい。野次馬の声が聞こえてくるが、どうやらこの世界の人間は、殆どア『個性』という能力を持つているようだ。そしてその中から、「悪」に走るものやヒーローになるんのがいるらしい。

「どういふか、なんでヒーローは彼を助けない？　まさか『個性』とやらの相性で手を出さないのか？　子供が助けを求めているのに？」

こちらが手を出せば世界のバランスに抵触する可能性があるが、何故彼らは助けない。下手すると少年は死んでしまう。一人学生服の少年が飛び出したが、見た限り能力も何も使わず、ただ闇雲に突っ込み、手を伸ばしているに過ぎない。

しかしそれが尊いように見えた。自己犠牲ともとれる蛮勇。自らの身の安全を度外視する行動、まるで己の父親を見ているような感覚に襲われる。それでも動こうとしたいヒーローたちに無性に腹が立つた。

ここで彼らを助けなければ、己が世界の家族に顔向けができない。そう考えてからは行動が早かつた。建物の上から飛び降り、拳を構えてヘドロ野郎に突っ込む。

「一つ音を超え、二つ間を無くし、三つその剣を絶つ！！　少年、だけ！！」

「え？ は、はい！？」

「『破突拳』、散り爆ぜい！」

四歩目の時にヘドロに拳を突き刺す。魔力も属性も込めたその拳により、打ち込んだ拳とは反対側のヘドロが弾け飛んだ。それにより、中の少年が脱出できるほどの隙間と穴が开く。

「かっちゃん!! このおお!!」

「デクつ、俺一人でも……」

「いいから、逃げるよ!?」

少年が学生服の少年が人質の少年を連れ出し、逃げ出す。それを見届けたときにヘドロ野郎が形を取り戻し、こちらに向き直った。

「オレの邪魔をしやがって……でもお前のほうがいい隠れ蓑になりそうだな」

「……は？」

「決めた、お前を隠れ蓑にする!!」

「こちらに吹き飛ばされたことなど忘れたのか、今度は俺を取り込もうとする怪人。さて、ヘドロなら乾燥させて碎くなり、硬化させて碎くなり出来るが。流石にこれ以上注目を集めるのはまずいのかも知れない。そう考えていると。

「君に諭しておいて、己が実践せぬとは!!」

そう叫びながら、一人の筋肉モリモリマツチヨマンが飛び込んできた。その顔は不敵な笑みを浮かべており、その金の前髪は「V」の字のような形をしていた。そしてその男も、拳を構えてこちらに突っ込む。

「プロはいつだつて命懸け!!!! DETROIT SMASH!!!」

その男のパンチにより、ヘドロは木つ端みじんとなり、空に浮かんでいた雲までもが吹き飛んだ。というか、よくそれだけの風圧に建物が耐えられるな。元の世界なら一軒や二軒は吹き飛んでいるだろう。

まあそれは置いといて、どうやらこの男はこの世界でとても有名なヒーローらしい。

スカイハイみたいなものだな。観衆とヒーローの視線がそちらに向かっている。ならこれを利用しないわけがない。志貴さん直伝の気配遮断でその場を後にする。さて、先程の少年を探そうか。

友人？ を助けようとした少年は、それからしばらくして見つかった。そのころにはもう日も傾きかけ、夕方になつていた。何やら先ほどの大男と話していたから隠れていたが、どうやら話は終わつたらしい。能力を解除したのか、ガリガリに小さくなつた男が去つたので、オレは少年の前に出てきた。

「やあ、少しいいかな？」

「え？ ああっ、昼間の！？」

「ああ、初めましてだな。オレは衛宮剣吾、きみは？」

彼は緑谷出久、この世界では珍しい『個性』を持たない人種らしい。だが昔からヒーローへのあこがれを諦め切れず、これまで過ごしてきた。そして先ほど、大男——オールマイトというらしい——の『個性』を受け継ぐことによつて、ヒーローへの道の光明が見られたそうだ。

「そうか。緑谷君、一つ問うぞ」

「は、はい」

「……『ヒーロー』と『正義の味方』、その違いは何だとども？」

「え？ 『ヒーロー』と『正義の味方』、ですか？」

『正義の味方』と『ヒーロー』、一見この二つの言葉に大きな差はないようと思える。だが決定的に違う。『正義の味方』はそれ即ち、その時代の正義に則った守護者であり、大衆正義と相反する者であればすぐに断罪される。警察や公安は、ある意味この『正義の味方』のカテゴリに当てはめることができるだろう。

では『ヒーロー』は？ 『ヒーロー』と呼ばれるものは、得てして超人的能力で英雄の様な立ち回りをする人を指す。その拳を振るう理由は大衆正義と己が正義が込められている。

それを考えるのなら、俺や父はダークヒーロー、アンチヒーローに位置づけられるだろう。己の義に従い、拳を振るい、剣や銃、弓を手に取ってきた。そしてその行動が偶々大衆の正義と合致し、英雄だなんて称号を与えられてしまつた。

「……」めんなさい。すぐに答えを出せそうにないです。でも

「うん？」

「とても、とても大事な問い合わせることは分かります」

「そうか。というか、オレも初対面の少年にこんなこと聞くべきではなかつた。少々人げないどころか、礼儀もあつた者じやないな。だが、この質問の意味を察しているようなら、彼は下手に間違えた道に入ることはないだろう。

「すまなかつたな。こんな質問をして」

「あ、いえ。僕も思うことがありましたから」

「そうか。そう言つてくれると嬉しいな」

しかしオレの話に何か感じたのか、彼は真つすぐな目をしてこちらを見た。彼は一体どれほどの絶望を味わつただろう。本人は隠しているのだろうが、暴力を振るわれたところを庇うような動きをしている。オレやそういうった経験があるもの、オレの同業者やそれに近い者だけが気づく程度のものだが。その暴力は、恐らく彼が『無個性』だから、弱い者いじめとして暴力などを振るわれていたのだろう。それでも自分の夢をあきら

めないのか。

「……君は、眞の『ヒーロー』になれるかも知れないな」

「え？」

「一つだけ、これだけは覚えていてくれ。この世界では『個性』の有無でヒーローの資格が問われるのだろう。だが、ヒーローってのは何も『個性』があるからやるのではない」

「……はい」

「君も見ただろう。君の友人を助けようとしなかつたヒーローたちを」

そう言うと緑谷君は顔を俯かせた。彼も気づいていたのだろう。この世界のヒーローは名ばかりの、ただの自分の力を目立たせたい奴らがはびこっているのだと。オールマイトの様なヒーローは居るには居るけど、少数派の様だ。

「だからこそ忘れるな。大事なのは『個性』の有る無しじゃない。人を救いたい、人を守りたいという思いの有無だ」

「あ……」

「人を守りつつ、自分も大切な人の許へ帰る。そして己が義を貫くということは、他の義

を否定するということを忘れるな』

「……はい!!」

オレの言葉に思うところがあつたのか、真剣な表情で話を聞いてくれた。少し話過ぎたか、もうすぐ完全に日が暮れる。流石にヒーロー志望とはいえ、子供をこんな時間に外出させるのは気が引ける。そんなわけでオレは彼の帰宅まで付き添つた。夕食に誘われたが、流石に遠慮してその場を後にした。まあ仕方がない。なんせ……

「オレが気づかぬとでも?」

「君は……あの場にいた青年だね?」

すぐ後ろからオールマイトがついてきていたのだから。

「君は……」

「その先は答えるわけにはいかない」

「ツ!」

「あんたが何を警戒しているか知らんが、まあ安心していいだろう。俺はもう、この世界

と関わることはないだろうからな」

「どういう……ことだね？」

「言葉のまんまの意味だ」

そう言うとともにオレの足元には虹色の魔法陣が出現する。どうやら師匠はオレに帰れと言っているらしい。オールマイトはその様子に啞然として口をきけないようだ。

「喜べオールマイト。彼は『ヒーロー』としての器を持つている」

その言葉と共に、オレは虹色の輝きに包まれ、この世界から消失した。

剣の御子とハジマリ

ある時から相棒、ヴィルヘルムとの連絡がつかなくなつた。その時は丁度フィンランドのほうで大きな出来事があつたらしい。

何やら星のエネルギーとやらを喰らう存在が人工的に起きだし、偶々ヴィルヘルムがそれに対抗出来る唯一の切り札だつたらしい。エネルギーを吸い付くしたソレが地球を出ようとした際、ヴィルは対抗力を全開にしてソレを擊破、消滅させた。エネルギーは星に還つていつたが、ヴィルも消息不明となつた。

そのことを非常に焦つた様子で、彼の伴侶たるシェリア・エーデルフェルトが涙ながら電話してきたのは、記憶に新しい。彼女の義妹でヴィルの実妹をはじめ、あちらでの仕事仲間たちも血眼になつてゐるらしいが、見つからなかつたようだ。

「お前はいつまでそうしているつもりだ？」

「念のために見て回つてるんだ。地脈も、フィンランドを中心に色々と傷ついているか

で、オレは何をしているかというとだ。

らな。」

「そんなもん、お前ひとりでやらなくとも……」

「オレも当事者の一人だ、オレが負うべき責任なんだよ。」

件の彼をとつ捕まえて縛つて座らせている最中だ。偶々イギリスとフインランドから離れた地、アメリカに仕事があつてきてみたら、なんとサンフランシスコ近郊の、とある町の地脈を調べているこいつを見つけたわけだ。まあこいつが連絡を入れないのはいつものことだし、今回もどうせ使い魔を使つたから大丈夫、なんて考へていてるんだろう。

「念のため聞くが、電話は？」

「……あのとき壊れた」

「連絡はしたか？」

「使い魔を送つた」

やつぱり。こいつの使い魔は送つて到着するまでに時間がかかる。通常の使い魔の二倍は確実にかかる、理由は知らないが。ただでさえ国を跨げば一日、二日単位の時間

はいるのに、こいつのなら一週間かかつたりするのだ。こういつちやなんだが、使うだけ無駄である。

「はあ～、電話貸すから自分で無事を伝えろ」

そう言つて俺は携帯を取り出し、相棒に渡した。まあこれでシエリアさんの心配事も一つ減るだろう。そう言えばこいつには二人、男の兄弟の息子たちがいたな。彼らも高校生故に表には出してなかつたが、行動の端々からこいつを心配しているのは理解できた。なんだかんだ言つて家族思いのこいつは、子供も大きな反抗期を迎えることなく、円満な家族生活を送っていたのだろう。

「すまない、助かつた」

「……泣かれたろ？」

「……ものすごく」

「だろうな。こいつを渡しとく」

俺が取り出したのは小さなピアス。一見ただのアクセサリーだが、実は高性能の魔術

礼装である。これと附合するピアスを付けている人間とは、仮令地球の反対側にいても交信できる代物だ。因みにその附合するものは、シェリアさんが付けていた。まあ相棒からのちよつとしたプレゼントだ。

「気を付ける。嫌な話を聞いている」

「ああ、魔術師のドッペルゲンガーの噂だろ?」

「目撃されたのは全て灰すらも残さぬよう処理されているらしい。ロードが時計塔の長となつた今では非道さは成りを潜めているが、未だ昔のように人体実験などをする輩も多い。今回の騒動も、その一環かもしけん」

「そうだろうな。元々俺がここに来たのは、その調査だからな」

今回アメリカに来たのは、そのドッペルゲンガーの調査をし、運が良ければアジトを見つけだすというもの。相手を消すなどという依頼は受けていないため、罠をはられたり、ヘマを犯さない限り危険なことになることはないだろう。

というより俺もこいつ同様、妻子を持つ身の上である。養子である翔太郎は故郷に戻つて探偵として活躍しているが、それでも心配はかけさせたくない。だから余計な藪を突くことはしたくない。



ヴィルと別れて、俺はワシントンへと向かつた。何人かの諜報員や軍人とも親しいため、彼らの仕事に関係ない、有益な情報を仕入れるためにもいる。今回のドッペルゲンガー事件は、彼らにとつても他人事ではない。何しろ魔術師に関係ない人物の事例も確認されているのである。首謀者が魔術師だけに、使えるものはなんでも使うということなのだろう。

もしもの時を考えて交通機関ではなく、自分の足でワシントンに向かうことにした。幸いとある世界でもらえた「ホイポイカプセル」にバイクが入っていたから、乗り物の心配はなかった。

アクセル全開で太陽が照り付ける中、まっすぐ伸びる道を進む。何日かバイクを走らせ、そろそろネバダ砂漠に差し掛かるころ。この砂漠は核実験場としても有名な砂漠である。まあ本来この地域は度重なる実験で放射線濃度が高く、通る人も少ない。とか規制されているかもしれないが、俺はこの地を走っていた。

暫く走つていると、急にあたりが暗くなる。まだ時間は昼過ぎだつたため、スコールなどの急な雨じやない限り、空が暗くなることはない。しかし暗くなつてはいるものの、雨が降るような雲行きではない。というか先ほどまで雲一つない快晴だつた。いきなり暗くなるなど、ありえる話ではない。

「となるとやつぱ魔術師、なのかな?」

『御名答』

俺の独り言に応えるように出てきたのは、全身を妙なボディースーツで固め、妙なヘルメットで顔をも覆つた人物。魔術礼装だろう、父とは少し意匠の異なるアゾット剣を携えている。ということはこいつは魔術師。

「答えはしないだろうが一応聞こうか。お前、一連のドッペルゲンガー騒動に関係しているか?」

『……どうだろうな』

「まあいい。んで、俺を張つていたということは、やるつてことか?」
『いやいや、そのつもりはない』

こちらの問いかけにもはぐらかすような応じ方をする、目の前の魔術師。正直声もマスクで変えられており、男女の判別もつかない。腰にアゾット剣を携えているが、攻撃する気配もない。が、罠という可能性もあるため、油断はできない。こちらはこちらでいつでも対処できるように、魔術回路を開いておく。

『エミヤよ、気を付けろ』

「何？」

突如目の前の人間は語りかけてきた。敵かと思ったが、何故か忠告してきたから、ペースを崩されるのも仕方がないだろう。

『この先には、この騒動の魔術師たち壇ねぐらのがある。トロガノフなどとは天地の差の実力者たちだ』

『魔術師、たちだと？　さて、それ以前に何故俺に教える!?　お前は一体……』

『ただのファンだよ』

『ファンだと?』

『お前と、生死をかけた戦いをしたいが、邪魔者がいると面倒だ。俺たちの戦いに、観客席は愚か、特等席も必要ない』

妙だ。どうやらこいつは自分と戦いたいそうだが、この地に蔓延る異分子が邪魔らしい。そしてこいつの話から察するに、その異分子が、ドツペルゲンガー騒動の首謀者たちらしい。どうもきな臭い。

『いいか。奴らに手を出すならば、出し惜しみなどするな。お前なら、どういうことわかるだろう』

『……教えろ、なぜそこまで俺に肩入れする。お前は誰なんだ』

『言つたはずだ、ただのファンだと。だが一つ明かすとすれば、俺もお前も、奴らの被害者ということだな』

「被害者?」

『これ以上話すことはない。知りたくば早く任務を終わらせるといい』

そう言い残し、目の前の人物は姿を消した。気配遮断にしては完璧すぎる。知り合いの殺人貴並みの気配の消し方だ。こうなつては自分では到底見つけることは不可能で

ある。今は諦め、先に進むしかないだろう。

アクセルをふかし、バイクを走らせる。何故か知らないが、この上ない寒気を感じる。このような悪寒がするときは、たいてい死にかけるようなことが起こる。そして今回の悪寒は今までの比ではない。四十を越して多少は衰えを感じてはいるものの、最盛期とあまり変わらない実力を持つ今の自分が、死ぬかもしれないような予感がする。仮面の男が言っていた、最初から本気を出さないといけないような案件になっているのだろう。

念のために連絡しておくか。

「……久しぶりだな」

『…………』

「あー、ちよいとばかり面倒な案件でな。今回ばかりは若しかするかもしねん」

『…………』

「ああ、簡単にはやらせんさ。だが一応な」

『…………』

「悪いな、忙しいのに。じゃあな」

何かあつたら頼んだぞ、
翔太郎。

剣の御子と幻の郷

ふと頬に風を感じた。閉じられた瞼からでもわかる、柔らかな陽光が起きることを促す。

「……あれ？ 外にいる？」

目を覚ますと同時に一気に意識が覚醒する。周りを見渡すと、地平線までに広がる向日葵畠に圧倒される。

しかし最後に意識を失った場所は、暗い地下深くだった。魔術実験でクローンを作り出し、固有結界などの研究をする魔術師を消す依頼を受け、相打ちになつたはずである。たしかに自分の命が抜け落ちていく感覚を認識していた。

「もし死んでいたとすれば、ここはあの世か？」

あの世ならまだ納得がいく。「英靈の座」なんてものがあるから、あの世があつても変ではないだろう。このような穏やかな風景も、現実離れしている世界のものと考えれば納得のいくものだ。加えて服装は死んだ時と変わらないが、体に解析魔術を掛けたところ、全盛期の二十代の肉体に戻っていることが分かった。

徐に立ち上がり、ヒマワリを踏まないようにして小道に出る。アスファルトで舗装はされていないが、花も道も綺麗に手を入れられている。余程管理が行き届いているのだろう。

「……しかしまあ、まさか自分のクローンにやられるとは。というか、あの時俺のファンといった輩も俺のクローンだし。やっぱ遺伝子上は同じでも魂が違うから思考も変わるんだな」

呑気にそのようなことを考えながら歩いていると、道の向こうから一つの気配が近寄つて来るのを感じた。視界には映っていないが、そのような距離から察知できるとなると、余程の強者なのだろう。現に肌に少しビリビリとした感覚が走っている。

暫く歩くと、彼の目の前に一人の女性が立ち止まつた。誰が見ても美人と思うだろう容姿に、その顔を守るようにさされる日傘。白っぽい上品なブラウスによつて、履いているいるターランチェックのスカートと首の黄色のリボンは映えている。

「……やれやれ。あの世かと思えば、どうやらここは人外魔境らしい」

「ふふふ。それは、言い得て妙ね」

「そう思わせる原因の一端が、貴方であることは……わかつて言つてるな、まつたく」

目の前に歩いてきた女性は、剣吾の言葉を気にすることなく、クスクスと笑みを浮かべて彼を見つめてくる。パツと見てただの美しい女性かと思うが、彼女から感じる、強大な人外の気配によつて背中に嫌な汗が流れる。

「あなた、見ない風貌ね。どなたかしら？」

「……衛宮剣吾だ。『宮を衛るは吾が剣』という意味が込められている」「そう。私は幽香、風見幽香よ。幽香と呼んでいいわ」

女性、風見幽香はそう言うと、こちらをジッと見つめてきた。なにやらこちらを推し

量るような視線に自然と力が入り、いつでも動けるように態勢をそれとなく変える。しかしその動きを目ざとく見つけたのか幽香は笑みを濃くしてこちらを見つめた。その目には猛獸のような、猛禽類のような気配を感じた。

「ねえあなた、それなりに強いでしょ？」

「……何を根拠に？」

「あなたが態勢を変えたの。気づかないと思つて？」

「……まさか戦えと？」

「話が早くて助かるわ。あなたの強さを知りたいのよ」

バトルジャンキー
戦闘狂の匂いを感じる。強者ゆえに、他の強い者と戦いたいのか、はたまたそれ以外にやることがないのか。まあこちらも特にやることがないし、付き合うのもやぶさかではない。それに、美女の誘いとなれば、受けないのは男じやないだろう。デートの誘いならばともかく、今回は戦い、浮氣にもならない……と思いたい。妻は愛が深いが、結構嫉妬深いのである。

「やるのはいいが、どこでやるんだ？　流石にこんな美しい場所を更地にするわけにも

いくまい」

「そうね。折角育ててきたこの子たちを傷つけるわけにもいかないし……」

どうやらこの向日葵の群生地帯は、幽香が手掛けたものらしい。自身の手塩にかけた子供ともいうべきこの地が、自分の私利私欲で損なわれるのはいただけないだろう。

それに若返った肉体の試運転をしたい、という思惑が剣吾にもあるため、一つ試したこと�이できた。

「短時間でいいなら、場所を提供できるが？」

「あら、あなた恐らくだけど外から来た人でしょう？　この『幻想郷』については、寧ろ情報が欲しいところじゃないの？」

「ああ確かに、俺はこの地について知らない。けどな……」

俺は話しながら前進に魔力を通し、俺を表す詩を紡いでいく。彼女も何かを察したのだろう、俺の行動を静かに見守っている。やがて俺の周りを黄緑色の風と鋼色の鱗粉が旋回し始める。最後の一句が紡がれたとき、辺りは一度白い輝きに包み込まれ、やがて一つの世界に二人は降り立つ。

水面の下には色とりどりの花が咲き誇り、その花を写す水平線には無数の主無き槍が突き刺さっている。常にそよ風が吹いているが、水面は穏いだかのように小波一つ立てていない。

極めつけは空だ。先ほどまではさんさんと降り注ぐ日の光があつたのだが、今は満天の星空が広がり、そして水平線の向こうには蒼く輝く月と地球が並んで見える。現実離れした光景を目の当たりにし、幽香は思わず固まってしまった。

幻想郷は人よりも妖怪が多数存在しており、妖術などの類を扱うのも多くいる。幽香自身も妖怪であり、先程の花畠も自身の「花を操る程度の能力」を以てして作り上げたものである。

世界一つを丸々作り上げるなど、幻想郷を作り上げた「隙間妖怪・八雲紫」ぐらいしかできないだろう。いや、紫にもできないかもしれない。彼女はあくまで「幻と実体の境界」を作つただけであり、厳密には一つの世界を作つたわけではない。

だが目の前に広がる光景は何なのだろうか。幽香は知らず、体を震わせていた。恐怖か武者震いか、自分でもそれがわからない。

「……お気に召したかな？」
「……ええ、十分よ」

最早言葉は不要。幽香は日傘を閉じ、剣吾は近くにあつた槍を二本引き抜く。殺し合いならば懷にある二丁のタウルスレイジングブルを使えばいいが、今回はただの力試し。互いに殺さない程度に全力を尽くすだけである。

一つの巨大な槍から水滴が落ち、地面に波紋を残した時、この作られた世界の中心でおおきな水飛沫があがつた。

どれほどに時間が経つただろうか。景色は夕焼けに彩られた向日葵畑に戻っているが、先ほどまでは違うのが二人の様相。女性は肩で息はしているものの、しつかりと己の足で立っている。が、男のほうは槍を杖の様につき、片膝を付けていた。

「……まつたく、予想通りのバケモンじゃねえか」

「それは私は妖怪だもの、下手に遅れはとれないわ」

「腕試しでこれだからな。殺し合いならどうなつていたやら」

結局は腕試しで負けという結果に終わつた。相手と違い、結界維持のための魔力を常時回していたことを加味しても、幽香は非常に強かつたと言える。特に彼女の使つたスベルカードと言うものは、回避するのにものすごく手間取つた。弾幕とはよく言つたものだ、父親の剣の絨毯爆撃がかわいく見えるほどの、異常なほどの光弾による包囲網だつた。

「外の世界もすごいわね。まさか世界一つを作り上げるなんて」

「まあ、そのあたりは特殊な事情なんだがな」

「そう。ねえこの後時間ある？ 戦いのお礼として御馳走するわ。勿論、この世界につ

いても教えてあげる」

「嬉しい申し出だけどいいのか？ こちらにしか得のない提案だぞ？」

「得ならしてやるわ。さつきの戦いもそuddi、あんなに面白いものを見せてもらつたもの。それに、あなたの世界の話も聞かせてほしいし」

成程、互いに情報交換すれば、お互に利のある話かもしれない。片方はこの世界の法則を知ることができ、もう片方は己の知らない技術を知ることができる。

そうと決まれば迷うことはない。剣吾は立ち上がりて埃を落すと、幽香についていく形で向日葵畑を歩いていった。